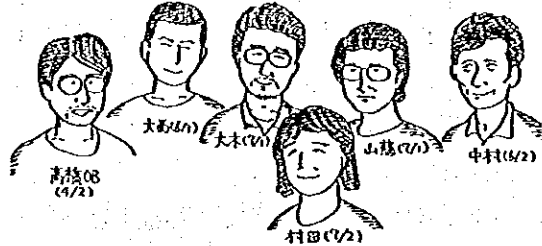


目次

1995年度理科教師部会の活動..... 1
マラウイ理科教師部会設置..... 4
理科教師部会設立について..... 5
マラウイに理科教師の派遣されるまでの経過..... 6
第1回理科教師部会 (Ifarera)..... 7
第2回理科教師部会 (Iicopola)..... 7
第3回理科教師部会 - 研究員集合 (Pisaha Secondary School)..... 10
第4回理科教師部会 (Iligogol)..... 13
第5回理科教師部会 - 研究員集合 (Iligogotata Secondary School)..... 16



マラウイ理教科教師

(4) タンザニア教育研究会・現地研修会

タンザニアに理教科教師が1990年に再会され、92年7月「タンザニア教育研究会」を発足させた。「タンザニア教育研究会会誌」が'93年2月に創刊され、'96年6月に第8号が出ている。会誌各号に「研究会」の活動の様子がくわしく記録されている。会誌 No. 8より、現地研修会の一部を紹介する。

第8回現地研修会について —研究会会誌 No. 8より—

I 開催要領

- 目的：①教師の資質の向上
②タンザニアの教育に関する情報交換
③教師隊員の親睦を深める

開催日：1996年6月4日（火）～6月7日（金）

場所：キゴマ

Ujiji Sec. School

Kigoma Sec. School

宿泊場所：Lake Tanganyika Beach Hotel

(旧名：キゴマレールウェーホテル)

参加者：タンザニア派遣教師隊員18名

M. S.	F. K.	K. I.	A. H.	H. K.	M. Y.
O. K.	Y. W.	Y. T.	K. T.	H. N.	D. M.
M. Y.	A. Y.	E. W.	N. E.	F. O.	T. T.

幹事：M. Y. (H6・2 Uji Sec.) A. H. (H6・1 Kigoma Sec.)

全体スケジュール：

【第1日】6月4日(火)

- 14:00まで ホテル集合
 (Lake Tanganyika Beach Hotel)
- 14:30 現地研修会開始
 プログラム説明
- 14:40-15:00 自己紹介
- 15:00-15:30 研究会Ⅰ「隊員活動報告」
- 15:30-16:30 研究会Ⅱ「授業のくふう」
- 16:30-16:40 休憩
- 16:40-17:40 研究会Ⅲ「教師隊員派遣のあり方」
- 17:40-18:20 研究会Ⅳ「現地教育実習への提言」
- 18:20-18:40 公開授業ワンポイント解説
- 18:40 自由時間・夕食

【第2日】6月5日(水)

- 7:00 朝食
- 7:30 朝の連絡
- 7:40 準備部隊 Uji Sec. へ移動
- 8:30 ホテル出発 Uji Sec. へ移動
- 8:45 校長表敬訪問
- 9:00 Open Class and Game Party 開始
 代表挨拶・自己紹介
- 9:20-10:00 公開授業Ⅰ
- 10:00-10:40 公開授業Ⅱ
- 10:40-11:00 休憩
- 11:00-11:40 公開授業Ⅲ
- 11:40-12:20 公開授業Ⅳ
- 12:30-13:30 昼食
- 13:30-15:30 交流会
 - ①カルタ取り
 - ②ドッジボール
 - ③BINGO大会
- 15:30-16:00 後片付け
- 16:00 自由時間・夕食

【第3日】6月6日(木)

- 7:00 朝食
- 7:30 朝の連絡
- 8:00 準備部隊 Kigoma Sec. へ移動

- 8 : 30 ホテル出発 Kigoma Sec. へ移動
 9 : 00 校長表敬訪問
 9 : 15-10 : 00 公開授業検討会
 10 : 00-10 : 40 討論会Ⅰ「派遣前に準備したほうがよいこと」
 10 : 40-11 : 00 休憩
 11 : 00-11 : 40 討論会Ⅱ「楽しいですか？ 学校生活」
 11 : 40-12 : 20 討論会Ⅲ「授業だけが教師隊員じゃないよ！」
 12 : 30 後片付け・昼食・自由時間
 17 : 00-17 : 30 反省会
 17 : 30-19 : 30 レクリエーション
 19 : 30-22 : 00 懇親会
 22 : 00 自由時間

【第4日】6月7日(金)

- 7 : 00 朝食
 8 : 30 ホテルチェックアウト
 空港へ移動
 飛行機でダルエスサラームへ

II 内容報告

(a) 研究会Ⅰ「隊員活動報告」

通常の授業以外に特別に行った活動について次の3人の発表者に発表してもらった。

- 「Kigoma Sec. & Ujiji Sec. 合同模擬試験」(M. Y.)
 「Tabora Boy's Sec. プラスバンド指導」(Y. W.)
 「日本人高校生のセカンダリースクール訪問」(N. N.)

(b) 研究会Ⅱ「授業のくふう」

- ①生徒を飽きさせないためのくふう
 ②宿題の与え方・試験と成績のつけ方

上記の各テーマについて最初に1人の発表者が自分流のやり方・考え方を発表し、その後、発表者への質問やその他の隊員のくふうを発表する自由討議を行った。

テーマⅠ：生徒を飽きさせないためのくふう

発表内容 (K隊員)：

数学の問題を解く場合、ただ単に解くだけじゃなくてその問題が回答者に何を求めているのかを生徒に理解させている。1つの問題をいくつかのステップに分けて、5分で回答できる問題なら20分ぐらいに内容を膨らませて説明を加えている。N. E. の問題には難しい問題もあるので、解答を見せるだけでなくかみくだいて説明している。このやり方で生徒らは結構のってきます。

導入・定義・例題・演習と展開する授業において、例題・演習に N. E. の問題を入れると生徒が注意して授業を聴くようになる。

難しい話が続く場合には雑談をはさむのも効果があります。歴史上の悪人の話を小話にまとめて用意しておき、授業中に話してやると生徒らは結構面白がって聴いてくれます。そして、雑談が終わったら気持ちを切り替えて授業にもどります。

その他のくふうとしては

- ・ 棒とチョークをひもでむすんだ小道具で円が描ける。
- ・ オレンジを切って断面が円になることを実際に見せる。
- ・ トランプで遊びながら確立の学習をする。

などが、考えられます。

最後に、生徒に自覚を持たせて勉強させるためにこんな話をしました。

お父さんは何をしているのか—仕事をしてお金を稼いでいるだろう。お母さんは何をしているのか—掃除・洗濯・料理をしてくれるだろう。じゃあお前らは何をすべきなのか。そう言うと、生徒らは自分が勉強しなければならないことを理解してくれます。

【質問・意見】

- N. : 生徒と雑談するときは英語・スワヒリ語どちらを使っていますか。
- K. : 両方使います。雑談は先週何をしたのか、きのう何を食べたかという話しをスワヒリ語でします。小話はスワヒリ語では難しいので英語を使っています。
- H. : 演習問題として N. E. の問題を使用するのは生徒の注意を引くのに大変よい。生徒の反応が全然違う。解答を時間をかけて説明するのは良いアイデアで自分もやってみたいと思っているが、とても時間が足りなくてシラバスをカバーできない。どうやって時間のやりくりをしているのか。
- K. : だいたい日に1、2問しかこなせない。問題はあらかじめ厳選して用意しておき、いくつかの別解も説明している。
- H. : 雑談の切り上げ方が難しいのではないか。自分のクラス (Form III・IV) では、雑談をはさむとうまく気分転換して授業に集中してくれることもあるが、集中力がなくなり収拾できないことがある。Form V・VIの生徒ではそのようなことはないのか。
- K. : 自分のクラスではしっかりけじめがついている。最初の授業で先生と生徒の立場をはっきりさせればよい。立場をわきまえさせないで授業をグラグラ進めても、授業がしまらなくなる。うるさい生徒を見せしめに立たせるのもよい。

(略)

(d) 研究会Ⅳ「現地教育実習への提言」

7年度1次隊より教師隊員に対する現地訓練の一環として教育実習が始まりました。これまで3回の教育実習が行われており、ここで一度その内容を振り返り、タンザニア教育研究会として問題点・改善点を取り纏め、事務所にさらに中身の充実した教育実習を実施してもらうよう働きかけを行うのがこの企画のねらいです。事務所あての要望書は後日まとめることとし、ここでは研究会で出された隊員の意見を列記します。

◇教育実習の内容

7年度1次隊

語学研修旅行中に先輩教師隊員の配属されている学校に約1週間滞在し、学校活動への参加、隊員およびタンザニア人教師の授業見学、模擬授業を行った。

7年度2次隊

ダル・エス・サラーム市内のセカンダリースクールで新隊員による模擬授業とタンザニア人による模範授業の見学を行った。期間は1日のみで、学校は長期休暇中だったが生徒に登校し

てもらった。教育実習のアレンジは事務所（調整員・現地スタッフ）が行った。

◇隊次別の意見

7年度1次隊

- ・移動時間、祝日の関係で滞在中に学校が開いたのは2、3日のみだった。
- ・隊員の生活が見れたのがよかった。
- ・配属後は失敗が許されないが、教育実習中はいくら失敗してもゴメンナサイで許されるのでこの経験は役立った。

〈略〉

◇総括

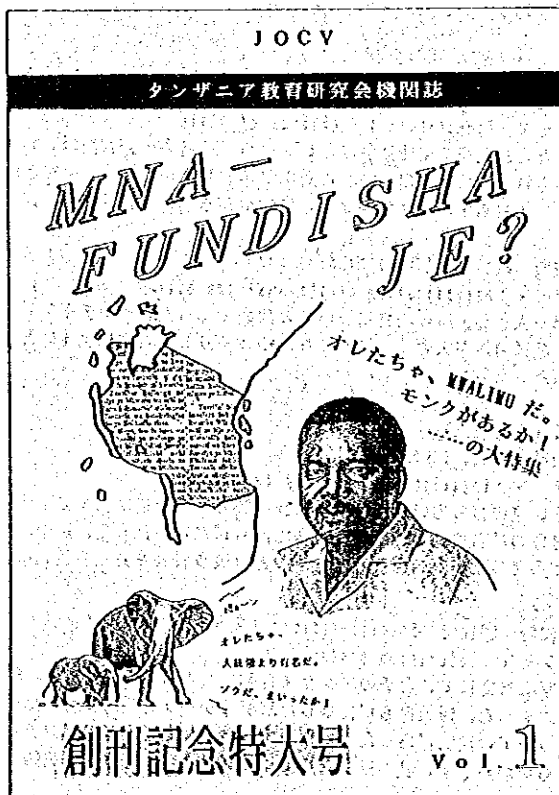
全般的には教育実習に対して肯定的意見が多く、内容を煮詰めていけばもっと効果的な実習になるのは間違いない。タンザニアでの教育実習はまだ始まったばかりで事務所としてもいろいろ試行錯誤をしているようだが、7年度3次隊のプログラムが完成形に近づいているのではないか。タンザニア教育研究会として改善して欲しい点を取り纏めて今後の教育実習の方向づけを行い、事務所によりよい教育実習を行ってもらおうよう働きかけたい。

〈略〉

(f) 公開授業

以前は、新隊員の度胸づけという意味で模擬授業を行っていました。しかし、7年度1次隊から派遣直後の現地訓練の中で教育実習が行われているため、今回はベテラン隊員を中心に希望者を募り、授業を行ってもらうこととしました。名称も“模擬授業”から“公開授業”へ変更しました。公開授業には Form IVの生徒が Ujiji Sec. から14名、Kigoma Sec. から12名参加し、以下の4隊員が授業を行いました。

1時限目 A. H. 数学（順列・組合せ）



てもらった。教育実習のアレンジは事務所（調整員・現地スタッフ）が行った。

隊次別の意見

7年度1次隊

- ・移動時間、宿泊の関係で滞在中に学友が聞いたのは2、3日のみだった
- ・宿日の生活が見れたのが良かった
- ・前回は失敗が許されないが、教育実習中はいくら失敗してもゴメンナサイで許されるのでこの参加は良かった

落

全務指

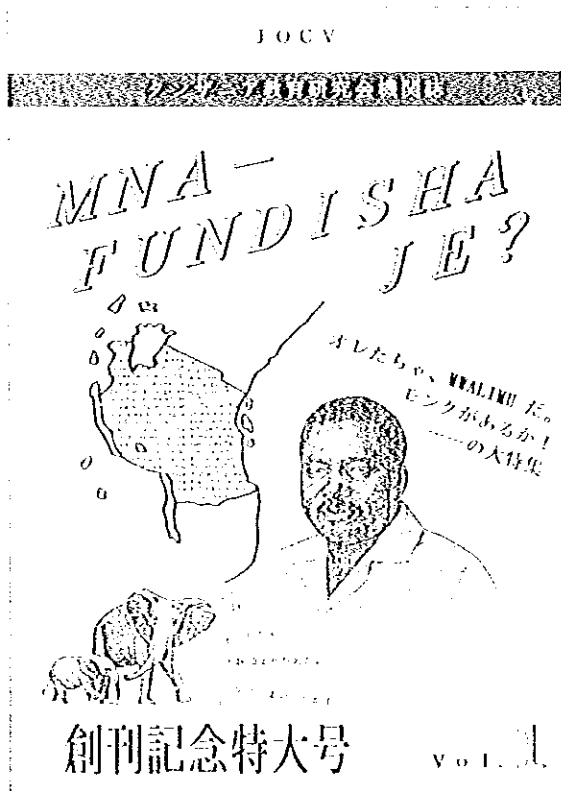
全体的には教育実習に対して肯定的意見が多く、内容を煮詰めていけばもっと効果的な実習になるの間違いない。タンザニアでの教育実習はまだ始まったばかりで事務所としてもいろいろ試行錯誤をしているようだが、7年度3次隊のプログラムが完成形に近づいているのではないかとタンザニア教育研究会として改善して欲しい点を取り纏めて今後の教育実習の方向づけを行い、事務所によりよい教育実習を行ってもらうよう働きかけたい。

落

(1) 公開授業

以前は、調整員の度教づけという意味で模擬授業を行っていました。しかし、7年度1次隊からの帰国直後の現地部隊の中で教育実習が行われているため、今回はベテラン隊員を中心に希望者を募り、授業を行ってもらうこととしました。名称も“模擬授業”から“公開授業”へ変更しました。公開授業には Form IV の生徒が Ujiji Sec. から14名、Kigoma Sec. から12名参加し、以下の4科目の授業を行いました。

1時限目 A. H. 数学（頭列・組合せ）



2時限目 M. S. 生物 (生殖)

3時限目 H. K. 数学 (微分)

4時限目 K. I. 測量 (Let's makes football court!)

公開授業は26名の生徒と教師隊員が参加し、生徒には通常の授業同様に授業を受けてもらいました。

〈略〉

(5) ザンビア・理数科教育ワークショップ (現地教員との授業研究会) 1997. 9

(JICA ザンビア事務所長より JOCV 事務局長へ)

報告者 H7/1 Y. T. (ワークショップ・オーガナイザー)

1997年6月7日 (土) ルアプラ州ムエンセ・セカンダリー・スクールに於いて、数学、理科の教科教育研究会を行いましたので報告いたします。まず始めに、ザンビア JICA 事務所より隊員支援経費をいただきこの会が運営できたこと、ルサカからK調整員、またカブエからTシニアはじめシニアの方々、そして隊員の方々、遠いところから何日もかけて参加していただいたことに感謝いたします。

これまでの経過

1994年から95年にかけて、北部州を中心に4度ほど開かれていたこの種の会も、平成7年1次隊の赴任の際、一斉にメンバーが変わってしまったこともあって、われわれ JOCV の活動としては忘れ去られてしまっていた。96年にセレンジェの教師から話が持ち上がり、9月に久しぶりに再開された会へムエンセからも同僚教師を2名連れて参加した。そのワークショップが非常に有意義でおもしろかったため、その時から「次回はムエンセでやりたい。」といっしょに行った2人と意見が一致した。

ここに至るまでの経緯

私がムエンセに赴任したのは95年8月の終わりだった。その年は学校やこの国の習慣に慣れるだけで精一杯だった。96年、一年通してフルに活動できるのはこの年だけだった。授業、クラブ活動、補習など時間の許すかぎり生徒や同僚教師たちと共に過ごした。その中で分かってきたことは、生徒の卒業試験のパス率の低さ、教師のやる気のなさや教える技術の低さなどは、結局、現職教育に原因があるのではないかということだった。現職教育は日本では頻繁に行われており、その目的は教授技術そのものよりも、教師に対して刺激を与えるという意味合いが強いように思われる。学校での教育活動というのは、生徒という対象は変われど教える内容などに変わりはなく、ともすればマンネリに陥りやすい。それを克服するにはそれ相応の刺激が必要であろう。良い授業を見ることによって視野も知識も広がっていくと思う。ザンビアでは、経済的な問題もあり、研究授業などを開く余裕は少ない。これこそが我々にできる、また望まれていることではないのか、と感じたのである。

計画しはじめてから

97年2月に第1回目の準備会議を持った。しかし、実をいうとこの前にも一度計画をしたのだったが、予定していた時間3時までに来た教師はたったの一人。呆れ返った私は、予定時間を少し過ぎたところで職員室を後にしたのだった。まず1回目に決めたのは、日にち、宿泊場所、食事や交通費をどう負担するのか、誰に呼びかけるか、そして簡単な役割分担だった。4月、2回目の準備会議を開いた。ここでは、具体的にどれくらい食事にお金がかかるのか見積もりをしてもらったの

だが、彼らの見積もり方はでたらめで、例えば、砂糖を一回の紅茶で100g使うなどという数字を平気で出してきた。この日は結局、見積もりの仕方を教えるだけで終わってしまった。5月の3回目には、無線を使ってほしい参加予定者がはっきりしたので、その数の確認と招待状の具体的な内容を煮詰めた。1学期の学期休み後、入れ替わった教師も含めて、もう一度役割分担のし直しをした。同じく5月、4回目には会の進行の流れを追って、それぞれの人間が何をするのか細かなチェックをした。この後も、5回目、そして直前にも6回目の準備会議をしたが、そこではそれぞれの分担された仕事の進捗状況を確認し、遅れているところに発破をかけていった。

とにかく計6回の準備会議を開いたのだが、19人いる数学、理科の教師のうち半分も集まればいい方、というような状況だった。第1回目の前の会議と1回目と2回目の会議を私自らボイコットしたりもした。何度彼らに時間の大切さを説いても、“Be punctual”や“We shouldn't miss the meeting”を繰り返すばかりで、何ら状況は改善されなかった。当初、準備会議の司会は同僚教師にお願いしていたのだが、いつの間にか私が司会をする破目になっていたりもした。それでもセレンジェにいっしょに行った2人をはじめ数名の同僚教師は真剣に議論をすすめていってくれて、彼らの存在が絶えず私の心の支えとなっていた。とにかく何度途中で投げ投げようと思ったことか……。

そして前日

心配はしていたが、やはり案内係の生徒がうまく誘導できず、昼過ぎから集まりはじめた他校の先生方に迷惑を掛けてしまった。夕食は、予定に入っていなかった本校の教師が食べてしまったり、遅く来る日本人のことを私が連絡し忘れていたりして時間どおりには行かなかったが、食事係の人たちはそれでも一生懸命にやってくれていた。狭いわが家に15人泊り、しかも水がないという不便を強いてしまったが、何分十分な宿泊施設もないところなので仕方がない。今後も、今回同様、地方でワークショップを計画する際には同じような状況になることは予想しておかなければならない。

ついに当日

はじめに、予定していたスケジュールと当日の流れをおっておきたい。

[予定]	[実際 MATHS]
08:00 OPENING CEREMONY	08:23
08:45	08:42
09:00 1ST LESSON	08:55
09:40	09:40
09:45 2ND LESSON	09:45
	* 2時限目終了まではぴったり予定通り
10:25 TEA BREAK	10:40
	* ティー・ブレイクの準備が少し遅れた
10:55 3RD LESSON	11:13
11:35	11:55
11:40 4TH LESSON	12:00
12:20 LUNCH	12:43
	* ここまでは特に問題なし

14:20 SEPARATE DISCUSSION 14:20

*教科別の反省会が異常に長くなってしまった

15:20 TEA BREAK 16:20

15:50 JOINT DISCUSSION 16:48

16:50 CLOSING CEREMONY 17:50

17:20 18:30

*教科別の反省会のツケがこの約1時間の差になってしまった

計画当初、一番心配していた食事の準備の遅れはほとんどなかった。あらゆるイベントで計画どおりに行かない最大の原因は、食事の準備である。この点は、係の先生方はじめ、当日手伝ってくれた生徒たちに感謝したい。こうして当日の流れを見てみると、教科別の反省会だけ予定を大幅にオーバーしてしまった。アンケート結果にもあるように、4つの授業に対して十分な議論をするには、1時間という時間は短すぎたように思う。このことはセレンジェの時にも感じていたことだった。議事進行をうまくやりさえすればと思い、司会者とも打合せをしたのだから、この同じ結果を招いてしまった。研究授業において、授業そのものももちろんなのだが、それ以上にその後の反省会は重要である。いくら良い授業であっても、個々人がそれぞれで観察しただけでは、「ああ、いい授業だったね」で終わってしまう。どこがどう良かったのか、またどう悪かったのか、などを議論することによって個人で掴んでいたものが全体のものとなり、定着もする。今後、もしこの種の会が計画されるのであれば、このことは十分に配慮してもらいたい。

個々の授業について

(数学) - Y. T.

1限目 Bearing by Mr. Abe (Mungwi)

導入で使われ術「ムエンサからムングイに行くには、どの方向に進めばよいか」は、ザンビアの教師たちに非常に評判が良かった。我々にしてみればどうということはない導入のように思われるのだが、こんなちょっとした工夫が彼らには目新しいようであった。最初に Bearing の定義を与え、授業を通して絶えずその定義を確認しつつ進められた授業は、私にとっても新鮮な展開方法であった。

2限目 Pythagora's theorem by Mr. Chibuye (Samfya)

授業をやった彼はセレンジェでのワークショップにも参加しており、そこで得た経験が生かされていた。予め用意された図なども手伝って、順序よく展開された授業は、見ている側を飽きさせることがなかった。授業の中で“ $X^2=9$ からXの値を求める”計算を、多くのザンビア人がそうであるように彼も両辺にルート記号をつけて、 $X=3$ としてしまっていた。このことはこの後の反省会でも徳田シニアにレクチャーをお願いし、彼らの誤解を解いてもらった。

3限目 Circle theorem by Mr. Bwalya (St. Mary's)

弧、弦、半径などの円に関する用語の復習を導入に用いたのだが、40分の内15分あまりをこの導入に割いてしまい、予定していた項目が未消化のまま終わってしまった。わかりやすくはつきりと、そして自信たっぷりに話すその態度には、見習うべきものがあった。

4限目 Rotation (Transformation) by Mr. Takagi (Mwense)

当初予定していたムエンセの教師が病気で倒れてしまい、代わりに私が授業をすることになってしまった。この2年間ずっと教えてきていた生徒たちただだけに反応は良かったが、やはりそれでも予定していた内容はこなせなかった。日本人による、しかも主催者側代表ということで、少し気負いすぎてしまったようだった。

(理科) - N. M.

1 限目 Electricity-Environmental science by Mr. Nachibinga (Mwense)

40分の授業にしては盛り沢山の内容をやろうとしすぎたようだ。教案には、「電流」「電圧」「オームの法則」「電流-電圧のグラフ」「電気量」の5つに加え、電流計、電圧計の実験付きでだった。これでは明らかに時間が足りない。何年教師をやっていたか分からないが、普段教案作成などしてないのではないだろうか。準備不足と言わざるをえない。

2 限目 Periodic Table-Chemistry by Ms. Mwansa (Serenje)

教師の作りだす雰囲気が高く、高圧的であった。又、計画していた内容が豊富すぎて、授業が散漫な感じを受けた。例えば、メンデレーエフは原子量の順に元素を並べていった際にある規則性に気付いた、といったふうに周期表が持つ規則性の理由やなぜ周期表のようなものが作られたのかという理由についての説明が必要であったと思う。

3 限目 Use and Abuse of Drugs-Biology by Mr. Mweshi (Nchelenge)

計画された内容が豊富すぎて、的が絞りがきれてなかった。アクティブな授業は、他のザンビア人教師とは一味違っていて評判がよかった。授業の内容自体は、今回 JOCV の中に生物を教えている隊員がいなかったこともあって評価しにくい。同じ理科と言えども、生物は特に専門用語が多く、化学、物理などを担当しているものにとって難しかったようである。

4 限目 Expansion of solid-Physics by Mr. Nakajima (Pemba)

「電線のたるんでいる理由」「線路に隙間のある理由」「ガラスのコップに熱湯を入れたとき割れる理由」など日常我々の周りにある身近な事象を導入に用いた。ザンビア人が「これは何?」「これを知ってるか?」と授業を展開していくのに対し、日本人は「この実験結果について推測しなさい」「なぜこうなる?」と進めていく。授業のあと生徒及び出席者から拍手が起こったが、これは暗記に頼ることなく、考えさせる授業というものが彼らの目に新鮮に映ったからに違いない。

紙やステンシルが充分にない中、すべての授業者がしっかりとした授業案を作ってきてくれた。日本人ボランティアの手助けもあったと思うが、それにしても各学校のワークショップにかける意気込みを感じ取ることができた。それぞれの授業の出来は、前回の反省が生かされたなかなか質の高いものであった。どの授業者も板書には十分気を使っていたし、授業の流れはどれもスムーズであった。40分の授業は短すぎる、時間をあまりに厳しく区切られたという意見が多かったが、定められた時間内でいかにいい授業をするか、が研究授業のポイントである。40分という授業時間の妥当性はさておき、時間内に授業を終わらせるのは、研究授業では評価の一つであることを知っておいてほしい。また、アンケート結果の中に、ザンビア人の服装は日本人のよりしっかりしていた、というのがあった。服装もしくは外観で、授業そのものまでも優劣を付けられるのは我々としても不本意である。次回は気を配りたい点である。

全体反省会について

結果的にどの議題も結論に至らず、そのことに対する不満の声が多かった。最も紛糾した話題は、マーキングの仕方であったが、このこと自体、各学校やクラスの状態にもよるので1つの結論を出すのは乱暴とも思える。結論そのものよりも議論する過程が大切なのであって、結論は各個人で探ってもらえば良いというのが私の意見である。とにかく何事も勝ち負けにこだわるザンビア人たちなので、このあたりまた違った意見を持っているのかもしれない。

他に話題になったのは、Chorus answers と教科書の使い方についてであった。教科書の扱いはわが校だけでなくどの学校も苦勞しているようで、まず第1の問題は生徒が借りた教科書を返さないことにある。学校には各国からのドネーションでたくさんの教科書があるのだが、紛失を恐れて貸し出さなかったり、管理が杜撰で年々数が減っていつてしまったりしている。もう1つの問題は、教師自身も教科書を使って勉強してきていないためか、授業の中でどう教科書を使っているのか迷っているようである。討論の中ではこのあたりが話題の中心になった。今回の研究授業で、教科書を一部でも使ったという授業は1つもなく、次回は、教材教具の使い方と併せて教科書の使い方というのを研究してみたらおもしろいと思う。

ザンビア人の授業観察の観点としては、①Time management、②Use of chalkboard、③Teaching aids、④Involvement of pupils、⑤Questioning technique、⑥Achievement of objectives、⑦Interaction with pupils、⑧Relationship with pupils、⑨Motivation、⑩Teaching methods、⑪Class control などが挙げられる。以前自分の学校で、同僚教師に同じ質問をしたところ、全体的を得た答えが帰ってこなかったということがあった。そこからすると、さすがは JOCV 隊員に選ばれて来ただけのことはある。しっかりと見るべきところは見ているなど感じた。このあたりのことになると JOCV 隊員も確かな知識を持っているとは言いがたいので、やはりお互いに学び合うというスタンスが必要であろう。

今後の展開 (提案も含めて)

今後もこの種の会が、企画されると仮定して話を進めることにする。まず第1に、研究授業会は継続的に行われる必要があるので、規模は小さくしなければならない。これは金銭的、移動にかかる日数、また連絡の取りやすさなどの理由からである。できれば、プロビンス単位くらいがサイズとしては適当ではないか。地元のパシック・スクールに呼びかけてもいいだろう。3校なり5校といった小規模の会を年に1、2回も開ければよいと思う。規模を小さくすることのメリットは他



杉山竜一7/1理教。ザンビア「クロスワード」'97、3月号掲載
1996.9.21 研究授業後の記念撮影

にもある。先にも述べたように、発言の機会を保障するという観点からも、あまりにも多い参加者数はかえってマイナス要素になりかねない。

最後に

彼らのコメントやアンケート結果の中に、“Pupils”という単語が頻繁に出てくる。それだけ生徒中心に授業を考えている証拠であると思われる。一般的に言って、ザンビア人の生徒への接し方は正に主従関係なのだが、こうして目の前には立派な教師たちがたくさんいることも見逃してはならない。結果的に、この会は刺激を与えているに過ぎないと言った人がいたが、私はそれでいいと思う。ただ大切なのは、こういった活動は、継続していかなければ意味が半減してしまうということである。今後、益々この教科教育研究会が発展することを願って、今回ムエンセで開かれたワークショップの報告としたい。

(6) パプア・ニューギニア理数科教育分科会授業研究会

〈報告書〉6/2 J. M.

1. 新任理数科教師のための現地訓練として教育実習

現地訓練は、約3週間にわたって、マウント・ハーゲン (Mt. Hagen) のハウス・ボロマン・ロッジにて行われた。現地訓練の主たる目的は、1) 現地語-ピジン語 (Pidgin) の習得、2) 現地の文化・考え方、生活に慣れる、の2つと理解している。訓練の内容は、ピジン語の単語と基本フレーズの練習を主に行ない、若干の文法的説明が加えられた。

私の場合、通常の現地訓練を終えた後に、理数科教師隊員として、理数科教育分科会主催による現地訓練をさらに一週間受けた。訓練は既に先輩隊員として活躍されている Boisen High School の S. Y. 隊員 (4年度2次隊) のもとで行なわれた。

訓練の概要、およびその結果に関する資料として以下に理数科教育分科会へ提出した報告書の抜粋を載せる。

1. 目的

- 1) P. N. G. の教育事情を知る
- 2) 理数科教師としての指導方法の確認 (教育実習)

2. 期間: 1994年8月6日~8月12日 (5日間)

3. 場所: Boisen High School (Rabaul)

4. 内容

- 1日目 ・午後ラバウル到着
・全校生徒の帰りの会見学
- 2日目 ・Y隊員の授業見学
- 3日目 ・Boisen High School の教師の授業見学 (Science、Maths 各1 Period)
・Y隊員の授業見学
- 4日目 ・授業体験 (1 Period Maths - Area of rectangle -)
・Y隊員の授業見学
- 5日目 ・授業体験 (1 Period Science - Pulley -)

5. 成果および感想

以下に述べることは、自分の赴任先である Malabunga へ来てから感じたことであるが、P. N.

G. の High School がどのようなものであるかということ、事前に通り実際に見たり体験している（しかも、不明な点は即座に日本語による説明を受けることができるという状況）ことによって、赴任先での導入が非常にスムーズであった。例えば、学校の1日の流れを事前に把握していたため、赴任第一日目から自分がどう動けばいいのか、自分で考えて自分から行動を起こすことができた。また、自分自身で実際に授業を担当したことによって、Malabunga での授業見学を行なう際に、ポイントを押えた見方ができたと思う。どの教科を週何時間担当するかについても、自分なりのイメージが描けているので、来週行われる Head Master および Subject Master との話し合いにも自分の意見を明確に持って臨むことができそうである。

2. Malabunga High School での授業研究会

1995年6月4日（月）、6月5日（火）の2日間にわたって、理数科教育分科会メンバー全員参加で、M隊員（6-1）の所属する Malabunga High School 視察し、授業研究会を行なったので報告する。

(1) 授業観察

すべての授業において教師と生徒のやりとりが多く、活気があった。また、生徒が挙手したり、発言が活発だったり授業への参加が積極的である。これは、言葉にメリハリをつけながらテンポ良く質問を投げ掛け、生徒を盛り上げている教師の技術によるものであろう。ただ、ボディランゲージなど、生徒に『見せる』ためのパフォーマンスが少ないのではという意見もあった。

授業の流れは板書中心ではなく、生徒が要点を声に出して反復することによってスムーズに進められている。

また、教師と生徒の間に『なあなあ』したものが感じられず、教師と生徒の関係がきちんと分かれている。

(2) 研究授業

又地隊員の授業を借りて、各自1コマずつ行ない、終了後反省会を行なった。

M隊員 Maths, Science Grade 7, 8 (平常授業)

T隊員 Maths. Grade 8 "Percentage"

O隊員 Maths. Grade 7 "Angle"

K隊員 Maths. Grade 7 "Angle"

反省会の中では、具体的かつ手厳しい意見が飛び交い、充実したものであった。各学校で、インスペクターや教科主任による授業見学が定期的に行われているが、そのときに貰うアドバイスは、オブラートに包まれたような回りくどい言い回しや、褒め言葉が中心である。まして、英語力の不十分な我々には言外の意味を汲み取れず、なかなか有益なアドバイスとなりにくい。それに比べると、この反省会での意見交換は、はっきりと『良い点・悪い点』が指摘してもらえるためとても参考になる。例えば、『宿題など、生徒のノートをチェックするときは、自分のサインをすると生徒も喜び、励みになる』、『授業で使う単語は、事前に必ず性格な発音を調べておかなければ、生徒に通じないことが多々ある』、『数学では、教科書の問題以外にオリジナルの問題を生徒に与えたほうが良い』、『生徒には、「全員書くのを止めて」「黒板をみて」といったような具体的な事細かな指示を与えた方がよい』などのアドバイスが出た。『ただただと説明し過ぎ』などの、厳しい指摘も出て、各人にとって吸収するものは多かったようである。

また、現地の教員の授業に比べると我々隊員の授業はどうもテンポがのろくなりがちであるが、

これは語学力不足に起因するもので、一朝一夕には改善できないので長期的な課題として各自取り組んでいかなければいけないという意見もでた。

(3) 総括

まず、施設・教材の充実しているお金のある学校である。これは E. N. B. P. がお金があるからであろう。州によって学校の設備に格差が非常に大きい。(例:ゲレマ州はお金がない。物もない。食物もない。教師もいない)

また、前述のように、この国の他の学校では見られない授業形態(生徒とのやり取りが多い)をしていた。授業運営、学校運営、規律、設備の充実度などで、日本の学校と比べても遜色のない学校という印象を受けた。

ある隊員は、「PNG の学校としては自分の配属先しか知らなかったのに、『この国の学校はすべてこんなもんだらう』と思っていた(あきらめていた)が、この国にもこれだけしっかりした学校があるのかという驚きとともに、今後の協力活動をする上で大きな刺激となった」という感想を漏らしていた。

4 教育意識を高める活動

(1) ケニアの育英奨学金制度(ケステス)

理数科教師隊員は地方のハランベースクールが協力の対象国であった。素質のある生徒が経済的事情から進学をあきらめる状況を見て、理数科部会が中心になって奨学金制度を考えた。1983年に発足、現在に至っている。

この活動は他のアフリカ諸国(ガーナ、ザンビア、タンザニア等)に影響を与えている。(実践報告書(1)参照)

(2) ザンビア・JOCVCUP スポーツ大会

隊員赴任校を中心にして、サッカー、バスケットボール、バレーボールの交流試合が行なわれている。これは、スポーツによるチームワークの団結心を高め、生徒のスクールライフを豊かにし教育の振興と学校間の交流を目的としたものである。その優勝校に JOCV・CUP が授与される。よって JOCV・CUP スポーツ大会と呼ばれる。隊員教師と現地教師との協力活動のためにも有効なイベントである。最近はピースコーも参加するようになった。(実践報告書(2)参照)

(3) ザンビア、ガーナの教育省との懇談会

ザンビアでは1989年にザンビア教育省中等教育局の担当官と話し合いを持ったとの記録がある。隊員たちが日頃疑問に感じていた教育上の諸問題を話し合うことができて大へん有意義であった。よって年1回定例的に開かれるようになった。

ガーナでも、1997年“教育省との懇談会”が持てるようになった。(実践報告書(3)参照)

☆実践報告書－(1)、(2)、(3)の報告書

(1) ケニアの奨学金制度ケステス(KESTES)

① ケステスとは

ケニアのセカンダリースクール(日本の中3から高3に相当)には、成績・人格ともに優秀で

あり、次世代においてケニアの貴重な人材となる可能性を秘めた生徒が学費の支払いができないために学業を途中で断念せざるをえない状況が数多く見られます。

そこで、このような生徒に対し、個人的に学費援助を行ってきた隊員も何名かいましたが、隊員の限られた任期の問題等もあり、より効果的に援助を行うべく、1983年にケニア隊員有志による奨学金制度が確立されました。それが、

青年海外協力隊在ケニア隊員有志による奨学金制度

Japan Overseas Cooperation Volunteers Kenya Students Educational Scholarship
略して、J. O. C. V. KESTES

更に略して KESTES (ケステス) と呼称している。

② 奨学金の内容

今年度初め21名の KESTES 奨学生が承認され、合計298,655ケニアシルの奨学金が支給されました。ところで、各生徒の奨学金の額ほどの様に決められているのでしょうか？ 本会の奨学金には、次のものが対象となり得ます。

- (1) 年間授業料
- (2) 受験料
- (3) 前年度までの滞納金
- (4) その他

以下、各項目について少し説明を加えたいと思います。

(1) ケニア国教育省は、公立セカンダリー・スクールの年間授業料の基準を設定しています。それによると、年間授業料は通学生で5,000ケニアシル（昼食代は除く）、寮生で13,500ケニアシル以内となっています。しかし、実際にはこの規定は守られないことが多く、授業料は地域、学校でまちまちです。一般には、ケニア西部地域で安く、首都ナイロビ周辺で高い傾向があります。また、学校によっては、通学生の授業料に昼食代が含まれています。（以下省略）

③ KESTES 奨学金の波及効果

今年度の奨学生として、アンドリュー・ムセンビ (Form 4) を推薦した。彼は KCPE で好成績をおさめ有名進学校への入学を許可されていた。しかし、家庭の経済状況から、叔父の家に近い、私の赴任校 (ンゴマノ・セカンダリー・スクール) に通うこととなった。

自分は、この生徒そして彼のいるクラスを3年間教えてきた。今振り返ると、それにしてもこのクラスは“イコ シダ ミンギ サーナ”であった。3年前に赴任した当初、当時2年生であったこのクラスには10名の生徒があつた。しかし、学年終了時には、生徒数は4名となっていた。生徒が退学していった主な理由が授業料の滞納である。その後、転入生を受け入れ続け、最終的に今年の4年の生徒数は9名となった。そんな彼らも、今年、KCSE を無事終了して卒業していった。

彼らはよく授業料を取りに家に帰されていたものだ。このクラスは特にひどかった。出席生徒の有無は教室のドアでわかる。朝学校に行って、教室のドアが開いているのを確認してホッとしたことも度々。出席生徒数が半分以下のことがよくあつた。教室に行って、今日は授業をするのか自習にするのかを生徒と相談したものだ。たった1名の生徒を相手に特別授業を準備したこともある。

そんな中で、クラスにムセンビがいるのといないのでは、全くクラスの雰囲気は違っていた。

彼の授業料を KESTES の奨学金でサポートすることは、間接的に他の生徒もサポートする結果になっていたようだ。

KCSE を終了して、彼と話をしてみると試験にはかなりの手応えを感じているらしい。彼には、ンゴマノ・セカンダリー・スクール創立以来最高の成績をおさめるであろうことが期待されている。彼の成績いかんによっては、来年には、より多くの生徒が入学して来るであろう。小規模校では、彼のような生徒の果たす役割は予想以上に大きい。

付け加えて、もしも彼がセカンダリー・スクールの理数科教師となってくれたのなら、協力隊員冥利につきると言えるだろう。そして、これは将来ケニアの JOCV 理数科教師数が 1 名減るであろうことを意味する。

とにかく、まずは 2 月末に発表される彼の成績を待ちたい。

④ KESTES への参加方法

KESTES の運営資金は、登録からの寄付により賄われています。

*ケニア国内での寄付は、JICA KENYA OFFICE の成瀬次長、各調整員及び各 KESTES 運営委員へよろしく願います。

*日本国内からの寄付は、隊員 OB・OG が中心となって下記の郵便口座（略）で寄付を受け付けておりますので、よろしくお願い致します。

(2) ザンビア・JOCV CUP スポーツ大会

ザンビアでは隊員赴任校間の親睦とスポーツ交流を重ねて、いくつかの地域に分かれてスポーツ大会を開催している。その優勝校に JOCV でつくったカップが授与される。

JOCV・CUP 争奪戦ということである。

JOCV CUP 94 北部州大会（報告）

報告書 5/1 S

本校（ムピカ・ボーイズ・セカンダリー・スクール）に於いて、本年度 JOCV CUP 北部州大会を開催いたしましたので、以下の通り報告します。

【目的】 スポーツを通じた各学校間の交流とスポーツ教育の振興

【期 日】 1994年6月10日（金）～12日（日）

【参加校】 北部州 Mbala Sec. (選手数58/教師6/共学校)

St. Thresa Sec. (同20/4/女子)

St. Francis Sec. (同38/5/男子)

Hungwi Tech. Sec. (同38/5/男子)

Kasama Girls' Sec. (同20/2/女子)

Mpica Boys' Sec. (同38/5/男子)

Lwitikita Girls' Sec. (同20/2/女子)

ルアブラ州 Nchelenge Sec. (同58/6/共学)

Lubwe Sec. (同48/5/共学)

中央州 Serenje Boys' Tech. Sec. (同38/5/男子)

参加隊員数 8名

【会 場】 初日・最終日：Mpika Boys' Sec. ならびに Musakanya Basic

2日目：女子協議は Lwitikila Girls' Sec. を使用

[競技種目] 男子：フットボール、バレーボール、バスケットボール

女子：バレーボール、バスケットボール

[宿 舎] 男子：Mpika Boys' Sec. (教室) 女子：Lwitikila Girls' Sec. (教室)

教師：ホスト校教師宅に分宿

隊員：ホスト隊員宅とレストハウスに分宿

[日 程] 添付資料「スケジュール表」参照

(現実には朝食準備が時間通りにいかず、1～2時間遅れのスケジュールで行われた。)

[準備会議] 4回開催 (9/25、12/3、2/12、5/14)

大会前日 (6/9) にコーチ会議を開いている。

[運営上の反省事項]

- ・各隊員の任地が離れているため、隊員間の話し合いが不足していた。準備会議に臨んでも意志統一が出来ておらず、話し合いの舵取りが出来なかった。大会中に持った反省会で、各準備会議の前日に隊員会議の時間を確保することを確認した。
- ・例年は各学校が大会中に使う食料を持ちよっていたが、今年は大会直前に北部州校長会議でそれが取り止めになった。理由は移動の際に大きな荷物(食料)が負担になるからとのことである。大会にかかる食費はすべてホスト校が負担することと決定されたが、政府からの予算が滞り、ホスト校ではやりくりが出来なくなってしまった。やむなく補助費を出すこととなった。来年度も同じ状況が予想される。食料の持ちより、または食料補助費の協力を参加校に呼びかけていくことが必要である。
- ・全体予算の3分の2近くが交通費にかかっている。その中でも大きいのはトラックのチャーター代である。ルアブラ州大会の分離やトラックを使わなくても良い会場での開催を考え、交通費の削減を計りたい。
- ・例年フットボールの試合をめぐるトラブルが起こっている。本年は大きなトラブルこそなかったが、試合時間を巡る紛糾や生徒の飲酒事件などが起こっている。今後も気を配っていく必要がある。
- ・食事準備の遅れが目立った。時間にルーズな国民性もあるが、食事の手配を隊員→スポーツ・マスター→ボーディング・マスター→ワーカーという経緯で行ったことにも問題がある。ワーカーに逐次確認をとる必要がある。

[今後の展望]

JOCV CUP のスタートはこの地域に大きなスポーツ大会がなかったことに起因している。北部州では、他地域に比べてまだ貧弱ではあるが、次第にザンビア人運営のスポーツ大会も育ちつつある。この点は明るい兆しと言えよう。しかし、交通費が確保できずに参加を断念する学校も多く、JOCV 主催の大会を開く価値は依然として残っている。今後は大会経費(交通費)の削減と独自の予算確保(チケットやグッズの販売、他のスポンサー探しや寄付、参加校の予算負担)を進め、次第にザンビア人主体運営の大会に変わっていくのがよいのではないかと思う。短期間に成し得るものではないが、まず、大会経費の削減から着手すべきであろう。そのために次の2点を考えていきたい。

- ・ルアブラ大会の分離：現在のルアブラ教師隊員は2名である。隊員数が増え、参加数が3名以上になった時点での分離独立を検討している。早ければ来年度からの分離開催も可能である。

セレンジェ（中央州）は交通の便から北部州大会への参加を希望している。

- ・カサマ（北部州州都）での固定開催：現在の参加校中4校がカサマ近くにあり、ムピカ、ムバラからの交通の便も良い州である。会場・宿舎となる施設もカサマガールズとルカーシャ T. T. I. の候補が既にあげられている。この2か所を使えば、2会場間の移動は徒歩で可能であり、トラックを準備する必要もなくなる。

以上の2点を実現すれば大幅な経費削減が期待される。同時に参加校の負担する予算の割合を増していくことも可能である。まずここから着手していきたい。

将来的にはカサマ競技場を借りて、フットボールの試合（準決勝・決勝）を行い、チケット販売で資金を獲得する案も出ている。この様な可能性を模索しつつ、運営主体を JOCV からザンビアに引き渡していくのが、今後の展開の理想ではないかと思う。

[その他]

JOCV CUP の写真資料を添付いたします。



バスケットボールの試合



試合に参加したピース・コーのメンバーと

(3) ザンビア、ガーナの教育省との懇談会

ザンビアでは1989年から教育省の中等教育局の職員と相互理解をはかる意見交換の場をもっている。当地では理数科教師をやったOBのN調査員がリーダーとして、定例的に開催されるように

なった。

ガーナも1997年から教育省の担当職員と懇談会を持つようになったとの報告を受けている。
教育省との懇談会（報告者：シニア理数科教師隊員 T. T.）

1. 日 時：1995年12月15日
2. 場 所：ホテルインターコンチネンタル
3. 参加者：JOCV 脅威隊員20名

教育省職員

Assitant Secretary for T. C. Mr. Khonje
Deputy Chief Inspector of Schools Mr. V. Tembo
Acting Chief Human Resources Development Officer Mrs. Gwaba
Principal Inspector of schools Mr. Sililo
Senior Inspector of schools (science) Mr. Nkhoma
Senior Inspentor of schools (Imathe) for T. T. C. Mr. Silwimba
Persomal Officee Mr. A. Malama
Senior Inspector of schools (Industrial arts) Mr. R. S. Mkole
Senior Inspector of Home Economics Mrs. F. Chisala

4. 内容

- 9：00 開会の挨拶
教育省職員紹介
各隊員個人の所見発表（各隊員）
数学コンテスト報告、質問（T隊員）
JOCV CUP 報告、質問（E隊員）
日本、ザンビア比較教育論（O隊員）
- 10：30 休憩
- 11：00 教育省への質問事項（各担当者）
JOCV に対する要望（教育省）
JOCV の今後の方針（N調整員）
- 12：30 立食会

仕事分担

隊員支援経費申告……T隊員
各隊員への連絡……E隊員
ホテルの予約……T隊員
会場係……S隊員
資料印刷係……
録音係……
司会者……T隊員
書記……S隊員

注意1) 各隊員の活動報告、全体としての報告は教師会議の時までに、英文書にして提出。

注意2) 質問事項については、無線にて、各隊員が教師会議の時までに、調査報告をする。

注意3) National Policy については、教師会議の時に、ブレインストーミングをする。

注意4) 全体としての各活動は、報告後、教育省に対しての質問を加える。(担当者を定める)

注意5) 教育省に対する質問はあらかじめ回答を得ておく。

教育省への質問事項

1. 教師の転出のシステムを教えてほしい。途中転出を改善できないだろうか。
2. 住宅の管理の仕方はどうなっているのか。住宅不足や老朽化に対する対策はあるのか。
3. シラバスの振興具合はどうなっているのか。
4. 北部州における食料の遅配についての説明を求める。一般的な食料の遅配の原因は何なのか。それに対する対策は。
5. 運営予算に関して、予算を決める基準と過不足について。
6. 教師の人事について、人事権は誰がもっているのか。教師の職務上の評価報告書は提出されているのか。
7. モラルの低い教師に対する、対策はあるのか。
8. 学校の民主化についてどう考えているのか。(上級生の下級生に対する振舞など。)
9. 学費免除に制度が有効に働いていないのはなぜか。
10. 追加合格、途中転向の手続きについて。

V

現地適応の生活と意見
—— 隊員報告書より ——

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

PHILOSOPHY DEPARTMENT

PHILOSOPHY 101

LECTURE 1: INTRODUCTION

LECTURE 2: THE FOUNDATIONS

LECTURE 3: THE CLASSICAL TRADITION

LECTURE 4: THE MODERN TRADITION

LECTURE 5: THE CONTEMPORARY TRADITION

LECTURE 6: THE FUTURE OF PHILOSOPHY

LECTURE 7: THE HISTORY OF PHILOSOPHY

LECTURE 8: THE PHILOSOPHY OF LANGUAGE

LECTURE 9: THE PHILOSOPHY OF MIND

LECTURE 10: THE PHILOSOPHY OF SCIENCE

LECTURE 11: THE PHILOSOPHY OF LAW

LECTURE 12: THE PHILOSOPHY OF ARTS

V 現地適応の生活と意見——隊員報告書より——

協力活動の“心構え”は活動した者からきくのがよいと思う。そこで隊員の報告書から抜き書きすることにした。

自然環境、社会環境、経済環境、生活文化環境、言語環境等々を今まで生きて来た日本と異った環境での生活であり、仕事である。戸惑うことの多いのは当然である。ものの見方、考え方、行動の仕方を現地の人々の拒否反応を起こさないよう弾力的な対応が必要である。つまり、現地への適応である。どんな事柄で適応をはかったらよいか、隊員の実体験からにじみ出た言葉を定例の報告書から抜き書きすることにする。次の項目に類別して置く。

- (1) 心と身体の健康を保持する
- (2) 協力活動は人間関係（コミュニケーション）を大切にする
- (3) 文化のちがいを知り、知らせる——異文化間コミュニケーション——
- (4) 期待される活動のあり方を知る——マンパワーか技術移転か——
- (5) 仕事（授業・指導助言等）の成果を高めるために
 - ①ことば（語学力）——話しかける
 - ②経験——教職経験のあるものは生かし、ないものは現地で積む
- (6) 特技・趣味を生かす——授業以外での活動——
- (7) 後輩隊員に希望する
- (8) 協力活動を終えて思う

1 心と身体の健康を保持する

タンザニア 3/2

協力隊活動を行っていく上でもっとも大切なことは自分の精神状態をいかにして安定に保つか、ということだ。赴任後1ヶ月間はマラリアの恐怖、土地に対する不慣れ等、いろいろな要因が重なって、精神状態が混乱していた。この状態を克服するには、日本にいる時と同じような生活、つまり人との交流を図っていくことが必要である。そのためには英語ではなくスワヒリ語を使う必要がある。目下、生徒と交流してスワヒリ語を勉強させてもらっている。少しでも言葉を早く覚え、自分の精神状態をより安定させ、かつタンザニア人との交流の機会を増やしていきたいと思う。

最後に I want to be a good citizen in Tanzania.

ザンビア 3/1

現地で活動するにあたり、自分の家以外に自分の居場所を見つけることができれば、活動がスムーズに進むように思います。

それが教室や職員室、クラブ活動でもいいだろうし、学校に限らず、同僚の家、村の教会、村の酒場……どこでもいいです。

自分が受け入れられ、認められているという気持ちがあれば、それだけでその村が好きになります。その村が好きになれば隊員活動が楽しくなり、ザンビア人が好きになり、ザンビアという国が好きになり、アフリカが好きになります。好きになれば、この人たちをもっと知りたい、何か自分にできることがあればしてあげたい、そのためにも英語をもっと知りたい……と意識が自然に良い方向に向かうのではないのでしょうか。

自分の任期はまだ途中ですが、ここに来ての最大の収穫はこの村が好きになったことです。

タンザニア 4/1

タンザニア人社会に溶け込む適応力

人種差別的偏見やエイズ等に対する偏見をもつことなく平等の立場で彼らとつき合えなければいけない。さもなければ日本人一人だけのここでの生活は大変苦しいものになる。

ガーナ 5/1

病気に負けない体力と孤独に負けない精神力。

多少の英語力と中学程度の理科が理解されていればよい。数学を担当するならば、ほとんど英語力はいらぬ。

一番必要なのは体力である。いくら気力があるからといって慢性的に腹痛、下痢等にやられたらまいってしまう。田舎の暮らしは並ではないということは、都会に住んでる者にはわからない。

タンザニア 5/1

喧嘩はせず、話し合いを続けるべきである。

業務以外の日常生活のなかでも理不尽に思うことや不愉快に思うことは多いが、やはり決して喧嘩はしてはけないと思う。

ただし、言いたい事、要求する事はきちんと相手に伝えたほうがいい。それをしないでただ友好的にふるまっても、相手は、この人には何をやってもゆるされるのではないかという錯覚を抱いてしまう。言いたい事ははっきり主張し、けして喧嘩腰にならないように心掛けたい。

ザンビア 6/1

ザンビア人はダメだと決めつけてしまわないことである。ザンビア人がダメなのではなくその個人がダメなのである。それを根気よく続けることである。またその過程において、理解しなければならないことは、お互いの中の違いである。日本人同士でも色々な考え方を持った人がいるのにましてやザンビア人においておやそういう違いを知ることは、お互いを尊重しあい理解するためにとっても重要なことであると思う。そうすれば頭にくることも減ってくるであろう。実際ここに来て心は広くなったと思う。

タンザニア 6/1

参考になるかどうかかわからないが、ここでは私が普段心掛けていることを書いてみたい。

私は「とにかく元気を出そう、前向きでいよう」といつも心がけているつもりである。

環境、制度その他、全てが違う中で、しかも慣れない英語での授業ということで、(特に最初は)うまくいかないことが多く、落ち込んだり、腹を立てたりとの連続である。そんな時、そうした気持ちをはきずって教室に持ち込んでしまうとますます悪循環に陥ってしまう。

2 協力活動は人間関係(コミュニケーション)を大切にする

ガーナ 3/1

『仕事よりも、もっと大切なものがある。』

この言葉は、2年の任期も半ばにはいった頃から強く感じていました。こんな私が、偉そうに大きい事を言う訳でもありませんが、協力隊というもの仕事だけじゃあまりにもおもしろくなさ過ぎると思うのです。

特に、仕事が忙しいばかりで任期を過ぎた方は、私に言わせるとたいへんな不幸者です。それか

ら、幾ら仕事をしっかりしていても配属先との折り合いが悪ければ、その人はもっと不幸者です。
(中略)

それでも、自分でいうのも何ですが、お陰様で任地の方では、人々との親近感と人づき合いの大切さを感じながら、とてもいい雰囲気でも過ごせました。

この人間関係こそ、我ら協力隊の最も重要なところではないでしょうか。

ザンビア 7/2

コミュニケーションをよくすることはザンビア人だけに限らず、他のボランティアとも持つべきである。特にルアプラ州においてはピースコーとの関係はとても良く、ソフトボールをしたり食事をしたり交流を持っている。そうやって彼らと付き合っていくと、ピースコーの考え方、アメリカ人の考え方を知ることができる。その中に共通点を見つけ盛り上がり、相違点を見つけ感心する。逆に彼らにとっても日本人というものを理解できるいい機会であると思う。私の任地にはピースコーの他に SNV (オランダ人) もいる。彼らと話すときとピースコーとはまた違った意見を持っている。だから他国のボランティアと話すことはとても有意義だと思う。語学の面で臆することもあるかもしれないが、私も最初はだいぶ苦労した。しかし、彼らもそんなことは百も承知なので私たちのレベルに合わせてしゃべってくれる。

ザンビア 7/2

現地の言葉 (ニャンジャ語) は少し憶えた。たまに使うと現地の人に受けがよく、コミュニケーションの潤滑剤である。しかしとても会話するほどにはいたっていない。近くに住んでいるピースコーの人は話せるのだからお前ももっと学ばなければいけないと言われる。英語もろくに話せないのにそんな暇はないと思っていたがこれからは少しはなせるくらいに努力してみようと思う。彼らにとっても英語は第二言語であり、ふだんの生活ではニャンジャ語で話している。特に村人、おばちゃん、子供達と会話しようと思ったらずひとも必要である。

タンザニア 5/1

業務を遂行するうえで特に注意すべきなのは、コミュニケーションをしっかりとるという点と決して喧嘩をしてはいけないという点の2点である。

何かタンザニア人と仕事をやろうとして失敗するときにはたいていコミュニケーション不足が原因である。仕事に対する、取り組み方、考え方の違いから、相手に当然伝わっていると思うことが、実は伝わってなくて、それが原因でうまく事が運ばないケースが多い。だからタンザニア人と一緒に仕事をする時は互いに誤解のないようにとことん話し合うべきである。

タンザニア 5/1

タンザニアで仕事をしていくうえでは、文化、習慣、国民性の違いからくる障害が数多くある。しかしこれらの障害は、タンザニア人との良好な関係を築き、コミュニケーションをしっかりとることによって大部分が解決されると思う。問題なのはこのコミュニケーションをしっかりとるための語学力にあるのではないかと私は考える。特にタンザニアに派遣される教師隊員は日本で英語の訓練をし、現地でも英語で授業をする。しかし授業以外は全くといっていいほどスワヒリ語の世界である。しかし、英語の学力が不十分で、スワヒリ語を学ぶ余裕がないからといって、スワヒリ語を憶えないと、タンザニア人との間にどうしても大きな壁ができてしまうのである。

サモア 4/3

基本的に親切な人々なので、仲良くやっていける。家を訪れるときの、手みやげの習慣や遠慮す

る習慣等も、日本人である自分にとっては慣じみやすく、サモア人を身近に感じさせる理由となっている。

問題はやはり言葉で、サモア語がもっとできれば、サモア人と時を過ごすのももっと楽しいものとなるであろうと思う。が、日々の仕事は全て英語で、一緒に暮らしているボランティア達とも英語で話すので、サモア語は全々上達せず、勉強しなくてはとあせる毎日である。

パラグアイ 5/2

特に注意すべき点はカウハーパートとのコミュニケーションであろう。仕事について、じっくり話しが出来れば活動は波に乗るであろう。教師はまず授業を行い、自分の実力を良きにしも悪きにしも見てもらう必要がある。仕事はそこから始まると思う。日本との違いに惑うこともしばしばあるが、仕事を続けていく内になんとかなるものである。

パナマ 6/1

隊員活動を始めてままだ頃は、うまくコミュニケーションをとることが難しいので、自分の言いたいことを紙に書いて渡したりして、何らかの方法で意志疎通をはかった方がよい。だまっても通用するのは日本だけで、パナマではそれは通用しない。最初は、自分の仕事にだけこだわらず折り紙でも何でもいいから相手の興味をひきつけるようなものを紹介すると比較的人間関係をよくしていけると思う。一番大切なのは、職場や家族の人たちとの人間関係をいかによくするので、自分の殻に閉じ込められず、たとえスペイン語がうまく話せなくても積極的に関わりを持つように努力した方がいいだろう。

ザンビア 7/2

話す事より感じとる事を学ぶ日本文化はそれ自体素晴らしいとは思いますが、海外では通用する概念ではない。日本人はもっともっと、自分の国と自分達の事について自分の口から話すべきである。それなくして相互理解はあり得ない。そしてそれが出来る最低限の英語力すら持たずに、国際協力にかかわるボランティアなどとは言えないのではないだろうか。

この件に関して、私は事務所にこうしてくれと頼んでいる訳ではない。事務所がどうこうできる問題でもない。ただ、日本人として国際協力に携わる人全てが、もう少しコミュニケーションの重要性に気付いて、語学の学習に割く時間を増やすべきなのではないかと思う。

トンガ 5/3

トンガ語の習熟度は他の首都隊員よりもかなり高い。エウア島では、まだほとんどのトンガ人がトンガ語で話しかけてくるからである。本島である、トンガタブ島では、トンガ語で話しかけても英語が返ってくるという状態である。私は、前者のほうが都合が良い。英語に関しては、「できない」というコンプレックスがいまだにあり、アメリカン・ピースコーなどの白人とはいまだに話しくいところがある。

また、学校においても、生徒の英語力が低いので、トンガ語を使ったほうが、理解されやすいと言う理由もある。

タンザニア 7/2

任国の人との交際のあり方として、スワヒリ語の挨拶を覚え、積極的に挨拶する。この国では“スワヒリ語で挨拶出来る” — “スワヒリ語が話せる” — “家族の一員” と見なされる。ただ近所の子供達は上手くしつけないと、“Omba omba” 物貰いの癖がついてしまい煩わしくなる。

近所の人とは仲良くすると防犯の面でもよいとおもわれる。私は長期休みの帰りは隣の家族に

“Kanga カンガ：一枚1,500シル、300円の腰に巻いたりする布、庶民的なプレゼント”のお土産を買って帰る。近所の人もよく家庭菜園の野菜を届けてくれる。

タンザニア 5/1

困ったらこの人ならいつでも力になってくれるという、信頼のもてる現地の友人がいることは活動する上での大きな支えとなる。そういう友人を作るために私が任国の人とつき合う時に心がけていることは、①相手の話をよく聞くこと②寛容であること（相手のペースに合わせること）③まずこちらからうちとけて、相手を信頼することである。

PNG 6/1

自分の場合、英語でコミュニケーションできるようになることを第一の目標としたので、現地語のピジンを話す努力を怠ったと思う。教師として話せなければならない言葉は英語であるから、英語も話せないのに他の言葉に手を出してられるか、という気持ちと、ピジンを話すか英語を話す機会が減るのでは、という危惧もあり、ピジンはほとんど使わなかった。しかし、このために、村人や子供との気軽な会話がしづらかったりということもあった。ピジンが話せたら、どれほどもっとコミュニケーションが弾んだかもしれないと思う事がよくある。言葉だけがコミュニケーションを良くする要因ではないが、大きな部分を占めることも確かであろう。現に、他の理教科教師隊員の中には、授業中は英語、放課後や職員室ではピジンでの会話を楽しんでいる者もいる。逆に初めからピジンに頼ってしまって、最後まで授業をピジンでやり続けた教師隊員もいる。自分は英語漬けになることを選び、確かに英語でのコミュニケーションにはほとんど不自由することは無くなった。が、そのために別の大切な機会を失ったかもしれない。英語、ピジンとの兼ね合いをどうするか、どうやって両方を上手に使いこなすかは、あらかじめ自分なりの考えを持っておいたほうが良いかもしれない。

3文化のちがいを知り、知らせる（異文化間コミュニケーション）

ガーナ 5/1

文化・習慣の相違点は色々あるが、やはり宗教のことが一番である。学校の休暇も Christmas・Boring Day・Easter・Ascension Dayなどに合わせているし、モスLEMは、自分達の祭日には、学校があっても、自主的に休暇としている。日本人がクリスマスを祝い、結婚式には神前、葬式は仏前で行っているなどと知ったら大変なことになる。「教会に行こう」から始まり、断れば「宗教はなにか。仏教徒はどのように神に祈るのか。」などなど質問責めである。しかも、言葉をかなり選んで話をしなくてはならない。一番神経の使う時である。

ザンビア 5/1

宗教が生活の中で重要な位置を占めていることはいうまでもない。日曜（あるいは土曜）にはちゃんと自分の属する教会へ行く、婦人会、青年会、壮年会などもあり、維持活動や勉強会も行われている。部族によっては男子の割礼や女子の大人への仲間入りの儀式をととても大切にしている。

タンザニア 5/1

ダルエス・サラームやザンジバル島はコーランの流れるイスラム教の町

お昼に2 hoursも休み人々はモスクへ行く。買い物もできなくて不便だった宗教が生活の中心をなしている彼らは、きっと日本人の無宗教を信じられないことだろう。経済の発展や効率ということと、彼らの宗教中心の生活は両立するのだろうか。

タンザニア 5/1

宗教はイラスム教とキリスト教、インド人のヒンズー教に分かれるが、宗教どうして対立したりはせず、互いに尊重しあっている。

ラマダン (断食の月) 期間中は飲食店が閉まっているところが多く困ることがある。私は無宗教だと言ったら“神を信じてないなんて人間じゃない”と言われてしまった。

タンザニア 8/1

隣の家族はイスラム教徒なので、現在 (1月中旬現在) はラマダーンで断食中である。(といっても日中だけ。) したがって、お昼時に調理をするのに気を使う。

ネパール 5/3

この国の文化について語るとき、ヒンドゥー教は切っても切れないものである。それほど生活に浸透している。また、この国の問題もヒンドゥー教と密接に結びついているように見える。人種差別や女性への社会的差別等かなり影響しているように思われる。そして、それらがさほど深刻な問題になっていないところがすごい。

この宗教が、人々の幸せを第一に考えて生まれたものなのか、国を治めるためにつくられたものなのかは分からないが、民族や性別によって同じ人間が社会的に公然と差別されているのは恐ろしい。ただ、人々はそれを謙虚に受けとめているようだ。それも、前世の業 (カルマ) によって今の自分があり、仕方がないという思いがあるのだろう。

ザンビア 7/2

話す事より感じとる事を学ぶ日本文化はそれ自体素晴らしいと思うが、海外では通用する概念ではない。日本人はもっともっと自分の国と自分達の事について自分の口から話すべきである。それなくして相互理解はあり得ない。そしてそれが出来る最低限の英語力すら持たずに、国際協力にかかわるボランティアなどとは言えないのではないだろうか。

タンザニア 7/1

タンザニアに来て文化・社会の違いを肌で感じるとともに、“郷に入っては郷に従え”という諺の大事さをこれほどハッキリと感ずることはない。

“時間を守らない”、“約束を守らない (忘れる)”、“謝らない”等々、日本の常識では考えられないことも多いのだが、いちいちそれらに目くじらをたてていたのではストレスがたまる一方である。とにかく習慣の違いを受け入れた上で、こちらから積極的にはたらきかけることが重要だと思う。

ガーナ 4/2

ガーナ人はおしゃれで外出には、アイロンのピシッとかけた服を着ていく。このほこりっぽいガーナで、あれだけのきちんとした服装を維持しているのには感心する

タンザニア 5/3

「責め合う」日本人、「許し合う」タンザニア人

日本人とタンザニア人とのもっとも大きな考え方の違いは、日本人が「責め合う」ことを基盤にしているのに対して、タンザニア人は「許し合う」ことを基盤にしていることではないだろうか。

PNG 4/2

週末は家族そろって教会にいき、一般に非常に家庭的であると思う。それと親戚がとても多いことにも驚く。P. N. G. ではよく言われることだが、同一の出身地ということで、かなり強い連帯感があるようである。

この人は、非常に信心深い。地元土着の宗教は勿論、キリスト教の影響もかなり強い。聖書はこちらの人にとっては、ノンフィクションで、決してフィクションではないようである。とにかく、聖書は生活の中心にあるようである。例えば、宇宙創生などの科学的事象さえも聖書にかかっている内容をそのまま信じている。

ガーナ 4/1

異文化に接するにあたって、相違点ばかりを口にしがちだが、果たしてそれが正しい接し方といえるだろうか？確かにガーナと日本ではほとんど地球の裏側に位置するわけで異なっていることは多々ある。例えばものを食べるにしても日本では大抵はしを使うわけであるが、ガーナは手掴みで食べる訳である。一見すると違っているように感じるが全く別のものというわけでもあるまい。根本における、ものを食べて栄養を取って生きていくということは全く同じである。更にその食べかたについてもよく見ていくと、同じ点が多い。例えば、日本でも寿司やおにぎりは手掴みで食べるわけだし(寿司をはして食べたりするのは邪道である)、このほかにも手で食べるものは多い。西洋でもサンドウィッチは手で食べる。さらに、日本でもガーナでも場合によってはスプーンやフォークを用いて食べることもするわけで共通点が多い。

相違点といえるものは実は表面的なことばかりなのではあるまいか？どこの国の人でも、衣食住がなければ生きていけない訳だし、人に会えば挨拶をするし、困っている人を見れば親切にするし、女性のおしゃべりはコスモポリタンだしでちょっと気を付けてみていれば同じことばかりなのではないでしょうか？とにかく一番重要なことは人間は結局その土地の常識にしたがって生きているという事実だと思います。

ケニア 7/2

宗教が広く深く浸透している点が大きく異なると考える。かなり真剣に勉強している人が多くいる。コーストにはイスラム教徒も多いが彼らの生活の基本は宗教であると言える。キリスト教徒も多くなぜそんなに真剣になるのかと考える自分が正常なのか異常なのかわからない。また異教徒であっても問題なくうまくつきあっている様である。

ケニアはこちらがニコニコすれば必ずニコニコする。陽気で親切な人が多く、彼らは人生を楽しもうまく生きるにはまわりと仲良くし、助け合う事が必要であると感じている。

フィリピン 8/1

文化・習慣の相違点については、今までのところ、基本的に日本人の常識からは考えられないような大きな相違点には遭遇していないと思う。

もちろん小さな違いはたくさんある。一番に気付く事は何といても宗教—キリスト教—の影響である。マニラでは最近、若者のキリスト教離れが進んでいるような話も聞くが、フィリピン国内の大部分の場所ではまだまだキリスト教が人々の生活の中でかなり重要な位置を占めている。大都會のここダバオでもその状況は変わらない。多く的人是家族で毎週日曜日に教会へお祈りに行くし、様々な場面でキリスト教上の行事が繰り広げられる。私自身がキリスト教について詳しくないので分からない部分が多く残念であるが、キリスト教を信仰する事で多くの人々が精神的に支えられているのは事実であろう。貧富の差が激しく人間の不平等な部分について納得のいかない事が多いこの国で、自分の置かれた状況を受け入れるためには“これは神の思し召し、私の運命だから”と考え事も一助になるのかもしれない。

もう一つ気付いた違いを挙げるとすると、この国は家族の結びつきが強くまた親族をしても大切

にするという事であろう。日本もかつてはそうだったのかもしれないが、今日では家族の結びつきがかなり薄くなっているように感じる。それに比べてフィリピン人はとても家族を大切にする。子供達は多くの兄弟や従兄弟等に囲まれ、人間愛に育まれているように思う。もちろん、家族・親族の結びつきが強い故の弊害もない訳ではないが、それでもやはりうらやましい。日本人がすっかりドライになってしまったような気がして寂しい。

根本的に日本人と似た文化・習慣であり、それほど戸惑う事もなく、むしろ彼等の温かさに頭の下がる思いをたくさんして来た。ルーズなところが目立ち腹の立つ事も多くがあるが、やはりフィリピン人はやさしい。愛すべき人々であるという最初の印象は今でも変わらない。

ケニア 7/2

人の住んでいる所という事で大きくは日本と変らない気がする。特にいなかでは自給自足が基本で現金はあまり使わない点で農家に似ている。もちろん日本の方が裕福であり生活は便利であるが。日本では電気、水道、道がそろって家を建てるが、ケニアではそれら全部が無くても家を建てるのでどこにでも家を建てられるのが便利である。

ケニアではマサイ以外は特に民族衣装を見た事はない。(ツルカナ、サンプルとかは行った事が無い。)一般的に西洋風であるが、コーストではアラブ風(モスLEM)や女性がまとうカンガ等が特徴のある服装であると言える。

食べ物に関してはコーストはいろいろな文化がまじっている事、食材が豊富である事等からバラエティーがあり大変おいしく日本人の口にあう。しかし基本はやはりウガリ(シマ)である。

ザンビア 7/2

ザンビアの学校に赴任して驚いた事の1つに、教師と生徒の間の非常に画一的な関係がある。生徒にとっては教師に対して越えられない一線がある様で、それに感心する事もあれば疑問に感じる事もあった。私は努めてザンビアの文化・風習に同化する様にしていたが、こと教壇に立った時には別であった。肌の色も国籍も越えて、お互いにナチュラルな人間同志として接する事を常に心掛ける様にしていた。

4期待される活動のあり方を知る(マンパワーか技術移転か)

ザンビア 3/1

教師隊員はマンパワーと言われるがそれでいいと思う。

日本人が彼らと共に生活したことに意義が見い出せるのではないだろうか。私たちが教えた生徒たちはいつまでも私たち日本人教師を忘れないだろう。

ケニア 3/2

3学期に入ってとても気持ちのよいことがありました。それは本校に講師として来たA君との出会いです。彼は現在ケニア大学に通う学生です。理学部で数学、物理を専攻しています。本校の卒業生で、なんと協力隊前任者の教え子なのです。「私はT先生に2年間教わりました。私は将来T先生のような教師になります」と楽しそうに話してくれました。私はそれまで、自分の活動が「単なるマンパワーとして終るのではないか」と不安と疑問を抱くことがありました。彼と出会って一つの答えが得られました。協力活動の成果がそこにあるように思えたのです。マンパワーの成果を知ったのです。

ヴァヌアツ 4/2

着任後“マンパワー”として現地人教師と共に業務を進めてきた。初年度はいろいろトラブル続きで授業内容はさておき、学校を“開く”ことに苦勞した1年であった。

校長の帰国により私を後任の校長にする話もあったが調整員とも相談し、JOCV はあくまでヴァヌアツ人のサポートにまわるということで辞退した。ヴァヌアツ人教師が後任の校長となり、私が彼のアドバイザーとして再スタートした。

ネパール 5/1

協力隊はボランティアであり、ボランティアとはマンパワーである。そしてマンパワー移転を声高に叫ぶ向きもあるが、そんなことにこだわりすぎて、自己満足すら得られないのでは(ボランティアとして)本末転倒ではないだろうか？

タンザニア 5/1

我々理数科教師に期待されているのは、現地人教師と同じマンパワーである。とにかく元気よくわかりやすい、楽しい授業を展開し、少しでも彼らの(生徒の)理解を深めることができれば、さらに彼らに何らかの刺激を与えることができれば十分ではないかと思う(私のような英語も不十分で、教師経験もない者としては)。こちらが前向きであれば、生徒たちはそれに応えてくれる。

タンザニア 5/3

タンザニア人教師と不足を補うマンパワーとしての協力効果は確かにあったと信じたい。どんな教師でもないよりいた方が生徒たちの学習のよいインセンティブになり得るからである。

しかし、外国人ボランティア教師としての優位性を発揮しタンザニア人教師にはできないような活動をするという意味での、マンパワーとしての協力効果を超える活動を実践することはできなかった。

ガーナ 6/1

最近のガーナ理数科教師隊員のなかでは現在のようなマンパワー的な活動に疑問を抱いているものも少なくない。ここ数年の S. S. S. の増加と、理数科教育重視傾向の急激な増大の中で、あまりうまく機能していない学校に勤めている隊員の中にもそういう気持ちが少なからずあるようである。しかし私はマンパワーで何がいけないのだろうと思う。そういう小さな活動を確実に行うことの大事さはその後の生徒が教えてくれる。ただ自分自身がガーナにいないので気がつかないだけなのである。

私の生徒の中には、セカンダリースクールで日本人に習った、という生徒が何人かいる。その生徒らは皆隊員のことを評価しているし、彼らに習ったことを誇りに思っている。それを聞いたとき、私たちの活動は間違っていないと思ったのである。

タンザニア 4/2

タンザニアの理数科教師隊員には、現地人教師の代替としてマンパワーが期待されており、他の職種のような技術移転的なことはとりあえず要求されていない。この『理数科教師がマンパワーである』ということには不満を示す向きもあるようだが、私自身は『マンパワーになれるだけで十分』と思っていたし、『技術移転』などという意識は最初からほとんどなかった。せいぜい、『私の仕事ぶりを見て周りの方が何かを感じてくれれば・・・』という消極的な意志を持っていたに過ぎないので、学校の組織や雰囲気改善されたとか、先生達の活動が変わったかというような目に見えた協力効果はほとんどなかったと言わざるを得ないが、日々の授業を通して生徒達にはいくらかのインパクトが与えられたのではないかと考えている。

ザンビア 5/1

2年間の任期での配属校における活動についてのみ考えれば化学教師の不足を補い、生徒が教師について勉強できた、ということでマンパワーとしての意味はあっただろう。

赴任当初からすでにうすうす感じていたこのぼくぜんとした疑問は、結局最後にはほとんど確信的な疑問になり、任期終了となってしまった。

この2年間の私の JOCV としての協力活動の印象は、というと JOCV の人間は“いいように使われている”、そして、広尾訓練所でさんざん聞かされた「技術移転」というコトバはどこ吹く風である、ということである。とにかくただひたすら“マンパワー”のみ。

前事務局長・青木氏は“マンパワーこそ大切”と言っていたが（それならそれでよいとして）では JOCV 募集の時のうたい文句、美辞麗句の「技術移転」は何なのか、と言いたくなる。

タンザニア 5/3

マンパワーの協力効果は長期的問題解決には役立たないと思う。タンザニア人教師不足をその場しのぎで解決するのに我々は大いに役立ったであろうが、真の問題解決のためにはむしろマイナスなのではないか。現地人教師の量と質、両面にわたる向上に役立つ援助こそ必要であろう。教員養成校へのエキスパートの派遣、教師のサラリー・アップのための経済的援助等である。

ガーナ 5/1

効果という点を考えると、配属先(学校)からは信頼を得ることができた(だろうと自分では思っているのだが)こと、単なるマンパワーとしかで協力できない教師隊員であるけれども、不足していた理科の教員を補助し、生徒に少しでも余裕のある教育ができたであろうこと、また始業時間を守ったり、生徒にプリントを配って授業を進めたりした自分の行動が、同僚の教員に多少なりとも影響を与えることができたのではないかと、それなりに効果はあったであろうと思っている。

ザンビア 3/2

協力効果の有無の判断はむずかしい。その上、理数科教師は典型的なマンパワー協力なので、協力の効果について検討することは難しい。はっきりしていることは、私が配属されたことで、ザンビア教師の負担が教師1人分軽減されたこと。

ボリビア 4/2

日本の学校においても同じことであるが、授業を進めるにあたっては知識、技術の伝受だけでなく、人間として幅広い視点にたって行なうべきである。こちらの学生、先生たちにもプライドがある。それらを無視してあまりにも技術移転などと力まない方がよい。

ボリビア 3/1

私は常に特定の技術移転にこだわることなく、工業化学の幅広い分野にわたっていろいろな人たちと仕事を行ない、勉強していくことを目的として活動を行なっている。それゆえ、配属先の他に大学(UMSA) ガラス工場(FANVIPLAN) などとかわりながら仕事を進めている。

パラグアイ 4/2

技術移転ばかり強調しすぎないようにすること。
それより“私は国際親善のために来た”“自分が勉強するためでもある”“いっしょに仕事をしてみたい”というところから始めたほうが、相手は我々を受け入れやすいのではないか。(実際、活動を通じて隊員が学ぶところのものは大きい)そしていっしょに仕事をすれば、技術移転をこちらが

するというより彼ら自身が彼らに必要なものを自分で吸収していき、結果として本当の意味でもって①技術移転②国際親善③青少年の育成の3つの目標が達成されるのではないかと思う。

パナマ シニア

前任者隊員の2年間の活動と私のこの1年計3年の活動で、文部省や教員に協力隊を理解してもらい信頼関係を築くという新規配属先の第一段階の目標は達したと言える。

高校物理教員の多くは、協力隊を好意的にとらえていると思われるし、文部大臣を始めとする文部省の幹部の理解もかなり得ることができた。

また、現在のパナマの学校教育が、校舎や教員配置などの最低限の必要条件をほぼクリアし、授業の質の向上を図るという段階になっていて、これは協力隊が技術移転するのに適した状況と思われる。

ネパール 5/1

協力隊はボランティアであり、ボランティアとはマンパワーである。そしてマンパワーである我々は自発性の見返りとしての自己満足を得られれば、それで十分である、と私は考える。私の場合、1年目の任地であるセカンダリースクールを離れるとき教頭が言った「あなたは、ここの子供の為に非常に努力しなすった。この学校に必要なのは、あなたの様な人間であり教師なんだ。マンパワーが必要なんだ。」という言葉で十分な見返りをもらったし、2年目も、カリキュラム・教科書開発に効果的に関わることができ、自己満足して、おつりが来るほどである。協力隊の内外に、マンパワーであることを嫌ったり、技術移転を声高に叫ぶ向きもあるが、そんなことにこだわりすぎて、自己満足すら得られないのでは（ボランティアとして）本末転倒ではないだろうか？

マラウイ 7/1

今後の協力の見通しとして「教師はマンパワーである」という見解を持つ以上、学校側が私たちに必要としている限り後任を切ってしまうという理由はないだろう。私たちが必要でなくなるのは、この国がボランティアを必要としないくらい発展を遂げてきたときだ（それがどのくらい先になるのかは見当もつかないが）。それまでは協力活動を続けていくべきだ。そして、この国に対する私たちの影響力を考えた場合、教師隊員の数はもっと増えていいと思う。私のような活動をこの国のあちこちで大勢の教師隊員が行うことになれば、社会に与える影響力は無視できないものになるだろう。

ザンビア 8/1

「技術移転」が協力隊のうたい文句であるが理数科教師に関していうと学校教育の成果が目に見えた形であがりにくい、教育とは息の長いものである。私は、理数科教師として田舎に赴任した隊員が周りの人と仲良く暮らし現地の人が日本人を身近に感じてくれればそれで成功だと思うし、現在までその成果は十分上がっていると思っている。

トンガ 4/2

ボランティアに対する考え方の差が著しい。オーストラリア、アメリカをはじめとして多くの国から多数のボランティアが長年にわたって来ているせいもあるのかも知れないが、彼らのボランティアに対する考え方は、少なくとも本学院においては、「一定期間この学院に来て、授業をして、そして帰って行くだけの人であり、それ以上のことを望んでもいないし、やってくれても困る」というようなものである。異論はあるかも知れないが、少なくとも私はそう感じている。「技術伝達」云々を言われて来た JOCV 隊員の意識とは相当にかけ離れたものを感じるし、それ故不満（JOCV 隊

員の) がうっ積してきたのも理解できる。

ガーナ 8/1

田舎の教師隊員が専らマンパワーになってしまう主な原因は隊員に教師経験がなく、現地教員のプライドが高いからである。また我が校の場合、数年前から学校の敷地が二つの場所に分離してしまい、それも原因の一つとなっている。

が、協力効果は確実に見られる。

生徒にも色々な生徒がいる。出来る生徒、出来ない生徒、色々である。その中から出来る生徒の何人かに聞くと、やはり中学生の時に、良い教師に恵まれている。そしてその教師達というのが、過去ボランティアに教わったという生徒達である事が多い。こういう話を聞くと、嬉しい。ゆっくりではあるが、流れている。止まってはいない。

フィリピン 7/2

CP への技術移転は教材を作成し、それをを用いた授業を行う事により成される。まず、基本的な実験又は教材を自分で作成し、CP に見せ、意見を聞く。それを改良し、授業指導案を作る。この指導案には時間配分や発問などが含まれている。実際に巡回指導で教員研修用に用いる前には CP の大学の生徒にトライアウトを行っている。

以前は私から教材を紹介するという形であったが、最近は CP の方から積極的に使いたい教材があるから作ってみようという話が進むことが多い。2年前と比較するとかなり大きな進歩である。まだ実行に関しては私の方からの場合が多いが、アイデアのほうはいつも CP から提案されるようになって来ており、技術移転は順調である。(CP = カウンハーパート)

ミクロネシア 8/1

もし誰かにどんな技術移転をしたのかと聞かれたならば、私は未来のコスラエ高校の教師に対して技術移転をした、と答えるだろう。生徒に書いてもらった私の授業に対する感想の中には、「あんな風にちゃんと説明して、質問にも答えてくれる教師は他にはいない」というものがいくつかあった。もし私の教えた生徒が教師となりコスラエ高校に戻ってきたときに、私の授業を思い出してくれその一部でも手本にしてくれたら、と思いながら私はいつも授業をしていた。いつも良い手本ばかり見せていたわけではないかもしれない。どうしてもうるさい時には、声を荒げて注意したこともあった。しかし生徒自身がその良い部分、悪い部分を見極め、良い部分だけを参考にしてくれればよいと思う。

5 効果的に活動するために

(1) ことば (語学力) — 話しかける

タンザニア 3/2

英語は確実に自分のいいたいことを表現できる力が最低限必要。日本で十分、勉強されることが望まれる。また、日常会話にスワヒリ語は絶対必要。タンザニアに来てからもヤル気さえあればすぐに向上する。気持だけを大切にしたい。

ザンビア 7/2

以前と比べるとかなりスムーズに会話ができるようになった。同僚の先生も来た頃、と比べると英語がうまくなったと言ってくれる。しかしまだまだ満足のものではない。自分と1対1で話してくれるときは相手が加減してくれるのでいいが例えば会議の時などは未だによく聞き取れない

ことが多い。授業においても言い慣れた言葉やあらかじめ授業の準備をしていたところはいいが、とっさにもっといい説明を思いついたときや生徒から質問を受けたときうまく表現できなくて歯がゆい思いをすることがある。

PNG 6/1

語学力は十分に磨いておいてほしい。訓練所で到達させようとしているレベルでは、要請国の要請レベルに達していないと思う。なんとか自分に鞭打って訓練期間中（本当は訓練に入る前からと言いたい）は死にもの狂いで語学修得に励んでほしい。語学の時間は絶対に英語以外の言葉は話さない（多分語学担当教師はその様に言うだろうが、ほとんどの訓練生は守っていない）等の誓いを自分で立てて実行してほしい。「どうせ任国へ行ったら嫌でも英語を話さなければならないのだから、今は多少楽しんでおこう」と考えている人もいるかもしれないが、嫌でも英語を話さなければならないときになって英語が話せないことがどれ程辛くて、ストレスのたまることなのかは、実際に体験してみるまでは想像が付かないと思う。

ザンビア 5/1

他の職場の様子は詳しくは知らないが、本校では授業と職員会を除いて現地語が頻繁に使われる。あいさつや簡単な単語程度は自分も覚えたが、会話に加わるまではいかない。現地語が話せることが職場や地域に溶け込むことに大きなメリットとなるのは明らかである。現地語についても任期全体を見通した学習計画を立てるべきであった。また、派遣前訓練や現地訓練の中に現地語に関する訓練またはガイダンスがあれば随分有効だと思う。

ザンビア 7/2

日本で協力隊に志願した時には、英語くらいまともに話せなければ務まらない職業だと思った。ところが現在、大して変わっていない英語力で、それでもつつがなく業務をこなしている自分がいる。たとえ語学が不得意でも、協力隊活動は十分充実するし、効果も上がる。このことに気付いたのは確かに収穫ではあったが、やはり語学力の無さからほぞをかむ事の方が圧倒的に多い。他国のボランティアが英語を使って自分の

ガーナ 8/1

ガーナにおける公用語は英語である。

私の英語は、隊員候補生として訓練に入った時の周りの不安とは裏腹に、大きく上達した。今、英語に関する不安はほとんどない。又、この英語の上達が、活動の充実に大きく貢献していることもとても良く分かる。

ザンビア 6/2

赴任当初は、職員会議にはまったくついていけず、授業でも舌はまわらないし、生徒の質問は聞きとれなくて、なかなか大変であった。それでもザンビアで1年以上生活して、任地に日本人が少なかったこともあって、ずい分上達した様に思う。職員会議でもだいたいの内容は聞きとれるし、授業中も適用に舌がまわるようになった。

現地語のログ語は、先学期から、同僚の先生に家庭教師についてもらって勉強している。挨拶や片言は喋れるのだが、仕事上使うことが少ないので、なかなか上達しない。

ザンビア 6/2

現地語（チチェワ）を先生について習いはじめて2ヵ月。年寄り、子供たちと少しずつだが、交流がとれるようになってきたのがうれしい。任期終了までにはペラペラになるぞ！と息まいてい

ます。

肝心の英語は、仕事上ではずいぶん慣れました。プライベートで深刻な話をするにはやはり歯がゆいおもいをするのはちょっとくやしいです。

ポリビア 6/2

言葉の問題はかなり私を悩ませたが、特に専門用語に関しては講義をする際下調べ、テキストの作成等時間を要した。日常会話に関しては、たいして問題もなく過ごせた。専門用語の問題はカウンターパートによって解決できるものと思われる。やはり専門性の合うカウンハーパートが必要である。

パラグアイ 3/1

下手なスペイン語で「理科は覚えることも大切だけど考えることが大切だ」というと「そうだ、そうだ」と同意はしてくれるが、そのためには授業の方法からかえなきゃいけない、という微妙なところは例え同意にも理解してくれたとは思えない。そこで、何とか自分で授業をして違いを知ってもらいたいと思ったが、いい授業をしきれない自分にもどかしさを感じるが多かった。そして「科学的な方法とは？」とはという質問にきちんと答えるけれど、その方法を生活の中で実践することまでは思いつかない（考えない）教師と生徒の中で、もっとスペイン語ができれば、と私のスペイン語に大きな問題点を感じた。

(2) 経験（教職経験、社会経験）——ある者は生かし、ない物は現地で積む

ガーナ 7/1

経験のある教師隊員はそれなりに機転もきくであろうが、私のように教師初体験の隊員は、広尾であれこれ考えても仕方ないので、広尾では語学をできるだけみがき、任地にいったら、同僚の先生といろいろ話をし、どういう方法がベストか考えたらよいと思う。“郷に入っては郷に従え”は、生徒にも効果的だし、自分自身もストレスに悩まされなくてすむと思った。

ザンビア 7/1

私は教師として働いていたため、たくさんの生徒と接する機会が持てた。そんな生徒たちにもがっかりさせられ、そして励まれさせて生活してきた。私は、教師隊員は他の職種の他に比べて恵まれていると思う。というのは、たくさんのザンビア人と接する機会があるという事である。その中には悪い奴もいるが、もちろん絶対いい奴もいるのである。そういういい先生、生徒たちの姿が私たちに勇気づけてくれるのである。私が思うに、この隊員活動をどれだけ有意義にするかは、どれだけ多くの一緒に働けるザンビア人を見つけることができるかという事であると思う。

ザンビア 3/1

理科（物理）と数学を担当できる後任が来てくれることを希望する。

教師経験はあってもなくても私はかわらないと思う。私の例で言えば、教師経験があるために、日本の生徒たちと比較してしまうところが多く、すぐにこの教育システムに入れなかったこともあったため、経験は問わなくていいと思う。まして、男女も問わないがなかなか閉鎖的な場所であるため、そのことを考慮に入れてほしいと考える。まして、私は武道というものを全く知らない人間であったが、こういうことを教えられる人であれば生徒にとっては大変プラスになると思う。

ジャマイカ 8/1

仕事の方は問題なく順調にしている。しかし、つきつめて考えてみると私の活動の中はかなりあまい点がある。2年目は1年目の経験を生かしてあまりあれもこれもやらず、質を高めていこう

と思う。教員経験のない未熟さを嘆いてもしょうがない。日々の経験を積みあげて努力をするだけである。

タンザニア 5/3

教師経験の全くない学生あがりの青二才が異国に来て突然教師になりあがり、その主要業務である授業に徹することをまず第一に考えてそれでよしとするか。何年も教え続けている経験豊かな同僚の現地人教師たちに教をこいながら、彼らに追いつくことをまず目指し、さらに日本人という立場を利用して彼らにはできないことを少しずつやってみよう。私はこうしてきたが、はるばる日本からやって来て、自分にしかできないことを追求するよりも、タンザニア人教師の穴うめに徹している自分に時々むなしさを感じるがあった。言葉の違いもあるし、教育制度の違いもある。日本人がタンザニア人教師になりかわることなどしょせん無理なのであろう。

ガーナ 8/短

教員養成校に派遣される協力隊員の条件について

教員養成校で教える生徒は、将来小、中学校の教師になるために勉強している。そのため、教科の知識を蓄えるのと同時に指導方法についての勉強をすることになる。

たびたび理科教師隊員の英語力について議論されるが、私自身の考えでは、話そう、何かを伝えたいという気持ちがあれば英語は後からついてくると思うので、必ずしも選考時の英語力は問題ではないと考える。むしろ私自身助かっているのは、小、中学校での現場経験である。特に小学校ではいろいろな科目を1人で教えるわけで、幅広い知識と経験が必要となるのは当然のこととなる。そして教員養成校の生徒は、まさにその経験を一番必要としているのであり、今後の選考基準では小、中学校での経験を問うべきである。

またこれも当然のことながら、体力、バイタリティー、環境への順応性が第一である。

- ・教員免許
- ・教員経験（小、中学校であればなお望ましい）
- ・ある程度の英語力

パナマ 6/1

1クラス30名弱であるが、3クラス、80名ちかくを相手に講義をする場合もあるので、そういう場に慣れていほうが望ましい。経験はあった方がいいかもしれないが、どちらでもいいと思う。ただ社会経験はあった方がよい。とにかく、人の出入りが激しく、大規模で、伝統や現地の習慣を重んじる所だから。例えば、きちんとした服装（必ずアイロンが当たっていて、女性はミニスカート・ショートパンツは禁止）に、コロン・化粧・装飾品類は付けた方がよく、靴は磨いてあるものを履く等である。男性も同様。

6 特技・趣味を生かす（授業以外での活動）

ガーナ 5/1

これは直接的な教育ではないのですが、間接的には役に立つだろうと思う。横4 m 縦2 mの世界地図を広間の壁に作成した。8色のペンキを用いたカラフルなものである。ガーナでは、初等中等教育に投資する金額が少ないせいか、地図を見る機会が全くない。地図の見方も知らない。自分達の国（ガーナ）がどこにあるかも知らないのが半数以上である。このリージョンで一番の学校の生徒の中である。世界がどの様な形かを若い人達が知らないということは、大変悲しい事だと思

い、この世界地図を作成した。また、日本がどこに位置しているのかを知ってもらう為にも効果は大だと思う。その他、図の前にはいつも生徒達がこの国はどうだ、ああだと会話している。

ガーナ 6/1

四月以降には新しいパソコンでいくつかのソフトを先生や生徒に指導し、夕食前は古いパソコンでSS1の生徒を対象に基礎のタイピングから指導した。

個人的な意見を言うと、パソコンを使う事についてはコンピュータの基礎知識など必要ないと思う。アプリケーションによってそれぞれ使用方法と目的が違うので、どの機種においても必要な事はタイピングだけだと思う。以上の私の見解を校長に伝えしっかりとタイプの練習をさせるようなレッスンを組んだらどうかと述べた。

ジャマイカ 6/1

授業以外にもおりがみや、日本食など日本文化を伝えるという意味では、他の先生達ともいろいろ影響を与えたと思う。日本人の考え方や風習など先生達から聞かれることが多かった。一部の生徒には日本語をおしえた。

ガーナ 6/1

ギタークラブはスピーチデイにむけて、その発表の訓練のため時折夜集まって練習した。私が来る前からギターを始めた farm 6の子らがクラブをリードして率先して練習し、たいそうたのしかった。しかし、SS3の子らは3年くらいでは時間が足りないのかまだ下手でそのため強くクラブをひっぱる事ができないので今後、旧制度の子らが卒業していった後が気がかりである。しかし同僚の音楽の先生が時々顔を出してくれるようになり、ギターの本も大量に作ったのでなんとかなるのではと期待している。

パラグアイ 5/2

今、ギターとアルパを現地の先生について習っているが、よくもまあこんなに上手に弾けるなあと思わず感心してしまうくらい、うまい。こういった人がパラグアイには、結構いるのである。

任地においてお金を使うことはほとんどない。2ヶ月に一度位の割合でジェルバを買う位で、他は実験で必要なちょっとしたものとか、お腹がすいて学校で食べるパンチョコぐらいである。

ガーナ 5/1

金曜日はダンスへ通う。近くのカルチャーセンターで、ガーナのダンスを習っている。トラディショナルなアドゥア、ケテケテなどの様々なダンスである。彼らが週末に働きに行く(結婚式や葬式)時についていって一緒におどることもある。

一年半前に始めたガーナダンスもガーナの文化を学ぶという理由からのもので今も続けている。ガーナ人の持つ友達関係(フレンドシップ)、接待心(ホスピタリティ)、文化に順応していく能力(アダプタビリティ)は、素晴らしいものであり僕の得た大きな財産である。

タンザニア 5/1

前回の12~1月の休暇からバガモヨヘイリンバという民族楽器を習いに行っている。この6~7月の休暇でまだ2回目なのでなかなか上達しないが、やっと一曲は習い終えたのもう少し上手く弾けるようになったら、生徒の前で弾いてみせるつもりである。

7後輩隊員に希望する

ガーナ 3/2

ここでは交替要員というより理教科教師に希望すること、私の希望する理教科教師像について述

べてみたい。

まず元気のいい人。少しぐらい英語ができなくても声が大きく、見るからにはつらつとした感じの人を希望する。“理数科教師はマンパワー”であると思う。何でもやってみようという意欲のある人。誠実な人を理数科教師隊員として希望したい。

ケニア 3/2

国をどうしようと思わないほうがよい。

出会った人、学校の生徒、先生、近所の人たちに役立つことをすればよい。

ホンジュラス 7/3

日本のやり方がベストだとは思わない。その国に本当に大切だと思ったことは、理解されるまで、少しずつ自分から示して行けばいい。そして、ホンデュラスのいい面も素直に学んでいけるように。

“人を責めず、自分を責めず”

この気持ちをもって、常に活動していかなければ、と自分に言い聞かせたい。

タンザニア 5/3

たとえ知人のいない学校でも、隊員が訪問したのなら大歓迎を受ける。そして、わずかな時間でもいいから生徒と話をし、日本の状況などを話したりする。これだけでも1つの立派な交流になるのだ。そして、その学校の状況を校長からの話などを通して知る。ただたくさん学校の足をふらりと訪問するだけでもタンザニアの教育状況をかなり理解できるに違いない。このようにふらりと知らない学校を訪問することをお薦めする。

ザンビア 7/2

辞退しない人をお願いしたい。

それ以外の希望は全くない。

(ちゅうちょするようであれば、協力隊を受験しないで欲しい、という意味も含まれていることをつけ加えたい。)

ザンビア 7/1

特に大きな問題はない。理科の先生の不足も思ったほどではない。これ以上いる必要はないと考えた。しかし是非また送ってくれという彼らの熱心な要求を聞いていると単にお金やドネーションを期待しているのではなく日本人の存在自体を望んでいることがわかった。理由はどうあれこれだけ日本人の存在を望んでもらえるというのはひとえに前任者の方々の努力のたまものであり、協力隊活動の成果がここによく現れていると思う。毎日下手な英語で授業をするだけでなく、探せばやることできることはまだまだある、そう思い後任を呼ぶことにした。

交替要員に希望することは、元気に仲良くやってくればそれでいい。

ソロモン諸島 4/3

途上国で生活しながら実感したことは、自己管理能力の良し悪しが、協力活動や地元の人々との人間関係にも顕著に現れるということである。生活条件の悪い途上国だからこそ自己管理を徹底しなければならぬ。特に衛生面・健康面での注意は大切で、管理能力の不足・甘さは病気やけがとなって自分に返ってくる。訓練所での徹底した訓練は、今考えるとその準備・練習のようなもので大変有意義だったと思う。はっきり言って、日本で自己管理のできない人間は隊員として赴任すべきでない。また、途上国に対して、ルーズな見方しかできないようでは、よい協力活動は望めない。途上国の人々も私たち日本人をしっかり見ている。徹底した自己管理能力と自分なりの確立した考

え方をしっかり身につけて赴任されるよう、今後の隊員に望みたい。

タンザニア 5/1

参考になるかどうかかわからないが、ここでは私が普段心がけていることを書いてみたい。

私は、「とにかく元気を出そう。前向きでいよう」といつも心がけているつもりである。

環境、制度その他、全てが違う中で、しかも慣れない英語での授業ということで、(特に最初は)うまくいかないことが多く、落ち込んだり、腹を立てたりとの連続である。そんな時、そうした気持ちをひきずって教室に持ち込んでしまうと、ますます悪循環に陥ってまう。とにかく元気で前向きな人がよい。

タンザニア 5/1

授業以外の学校行事やスポーツなどの活動をさかんに行ってほしい。この人々は腰が重くなかなか自分から動こうとしないので、企画力と統率力を持って周囲を巻き込むエネルギーが必要である。

さらにコミュニケーションをとるにはスワヒリ語を話すことが不可欠で英語はもちろんスワヒリ語も学習しておくことが望ましい。

日本人として日本の生活、文化、宗教等について十分な知識をつけておかないと、友人に説明できなくて困ることがある。

ソロモン諸島 6/2

教科書に則して授業を進めた場合、実験がかなり出てくるし、生徒もまた実験を期待しているので、日本の中学校理科の実験を扱えるぐらいの知識と技術は必要である。(従って教員免許、高校又は中学が必要) また運動部(ソフトボール、サッカー、バレーボール、バスケットボール、陸上、ラグビー等)の顧問を期待されているので、いずれかのスポーツを指導する気力(技術力はあまり問われない、もちろんあった方が良いが)があった方が望ましい。

ザンビア 6/2

特にないが、失敗を恐れず、何事にもTryしてみると、その分は、生徒、まわりの人々がかえしてくるように感じた。見かえり——そんなことは考えないが、がんばった分、これからの自分の糧となると思う。

ネパール 5/1

理数科隊員は地方の学校へ赴任することから、何をやるにしても1人でしなくてはならず、そのため自分のやりたい事ができずに終わることも多い。理数科分科会や Education Committee という横のつながりを使ってより強力なアプローチを行う必要がある。授業を持っていれば、学校を離れることができない現状があり、だからこそ横の関係を大切にしてほしいと思う。

フィリピン 7/1

明るく、協調性があり、人前でしゃべるのが好きな人、語学力があればいうこと無い、教員経験あればよいが、無くてもこちらに来てからの努力でなんとかなる。物理では助けてくれる人がたくさんいる。

タンザニア 6/1

我々理数科教師に期待されているのは、現地人教師と同じマンパワーである。とにかく、元気よくわかりやすい、楽しい授業を展開し、少しでも彼らの(生徒の)理解を深めることができれば、さらに彼らに何らかの刺激を与えることができれば十分ではないかと思う(私のような英語も不十